

2016 年度夏期鳥取大学 Global Gateway プログラム



文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」採択事業

表紙写真 グローバルフォトコンテストグランプリ「Together」

撮影場所 カナダ カナダ、Toronto Centre Island（撮影者 鮎川 優）

目 次

ウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラム	5
安東 大弥 農学部 生物資源環境学科 (2015 年度入学)	6
岡田 侑子 医学部 保健学科 (2016 年度入学)	7
吉村 虹希 農学部生物資源環境学科 (2016 年度入学)	8
宮里 昭太郎 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)	9
嵯峨山 透子 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)	10
細井 果奈 医学部 保健学科 (2016 年度入学)	11
三谷 真鈴 地域学部 地域環境学科 (2014 年度入学)	12
柴原 新弥 農学部 生物資源環境学科 (2014 年度入学)	13
天野 成 農学部 生物資源環境学科 (2014 年度入学)	14
夏期カナダ英語研修	15
岩根 侑 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)	16
栗谷 和希 工学部化学バイオ系学科(2016 年度入学)	17
一藤 基子 農学部生物資源環境学科(2014 年度入学)	18
岡本 珠里 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)	19
佐伯 猛 工学部社会システム土木系学科 (2015 年度入学)	20
坂井 駿之介 工学部社会システム土木系学科 (2015 年度入学)	21
山田 雅人 工学部 電気情報系学科 (2015 年度入学)	22
鮎川 優 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)	23
山本 航平 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)	24
長渡 麗歩 医学部保健学科(2014 年度入学)	25
國岡 順子 医学部医学科(2016 年度入学)	26
鐘築 千晶 医学部保健学科(2014 年度入学)	27
倉本 弥栄 工学部化学バイオ系学科(2015 年度入学)	28
竹内 昌子 医学部医学科(2014 年度入学)	29
田中 一誠 工学部化学バイオ系学科(2016 年度入学)	30
田邊 周 工学部社会開発システム工学科(2014 年度入学)	31
鈴木 菜月 農学部生物資源環境学科(2015 年度入学)	32
夏期マレーシアマラヤ大学英语研修	33
加地 満理奈 農学部生物資源環境学科(2016 年度入学)	34
岩本 広人 農学部生物資源環境学科(2016 年度入学)	35
胡摩 智英 工学部化学バイオ学科(2016 年度入学)	36
細川 航輔 工学部化学バイオ科学学科(2015 年度入学)	37
松尾 京亮 医学部生命科学科(2016 年度入学)	38
石原 卓弥 地域学部地域政策学科(2016 年度入学)	39
川村 菜緒 農学部生物資源環境学科(2016 年度入学)	40
前川 珠実 農学部生物資源環境学科(2016 年度入学)	41
太田 勝也 工学研究科情報エレクトロニクス専攻電気電子工学コース(2016 年度入学)	42
大島 祐輝 農学部生物資源環境学科(2015 年度入学)	43
中野 遥 地域学部地域環境学科(2016 年度入学)	44

辻岡 立 地域学部地域文化学科(2015年度入学)	45
島田 季依 農学部生物資源環境学科(2015年度入学)	46
福田 竜也 農学部生物資源環境学科(2016年度入学)	47
米田 裕也 地域学部地域文化学科(2015年度入学)	48
堀田 朋花 工学部社会システム土木系学科(2016年度入学)	49
末吉 孝大 農学部生物資源環境学科(2015年度入学)	50
齊藤 俊之介 農学部生物資源環境学科(2016年度入学)	51
夏期アメリカ英語研修	52

ウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラム

国・地域:ウガンダ

研修機関:マケレレ大学

参加者数:10名

期間:2016年8月20日(土)~9月9日(金)

内容: アフリカの東に位置するウガンダは、ナイル川の源流があり、アフリカで最大規模の大きさを誇るビクトリア湖に面しています。その緑豊かな環境にちなんで「アフリカの真珠(Pearl of Africa)」とも呼ばれています。

全学を対象とした研修では初めてアフリカ大陸で実施した本研修は、ウガンダにおよそ3週間滞在し、主に講義の受講とフィールド研修で構成されています。

講義では、ウガンダの首都カンパラに位置し国内で最も歴史のあるマケレレ大学において、マケレレ大学教員による英語での授業(英語コミュニケーションスキル、ウガンダの歴史、文化、経済、医療事情、教育事情等)を受講したほか、在ウガンダ共和国日本国大使館や、JICA(独立行政法人 国際協力機構)のウガンダ事務所を訪問し、日本とウガンダとの外交関係や共同協力事業、ウガンダについての基礎知識などを日本語で学びました。

フィールド研修では、JICA のプロジェクトサイト、病院や砂糖の生産現場などを訪問し、事前研修や講義で学んだ知識を更に深めるとともに、実際の現場で働く人の様々な声を聴く事により、多面的なものの見方を身につけるきっかけにもなりました。

また、現地の小学校やセカンダリースクール(日本の中学校~高校に相当)を訪問し、日本、鳥取、鳥取大学についてプレゼンテーションを行った後、折り紙やちぎり絵、書道などのアクティビティを実施し、交流しました。



ウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラム

安東 大弥 農学部 生物資源環境学科 (2015 年度入学)

「ウガンダマケレレ海外実践教育プログラム参加して」

このプログラムではウガンダの様々な場所を訪れた。医療施設、小中学校、JICA、NaCRRRI、ソースオブナイル、マーチソンフォールズ国立公園など。この中で特に、私は JICA が支援する NaCRRRI に行ったことが印象深い。なぜなら、私は農学部に所属しており、このプログラムに参加する以前から、アフリカの農業に興味があったからである。JICA と NaCRRRI では日本がアフリカに対して行っている農業支援について学んだ。私はさらにアフリカの農業に対して興味を持った。しかし、私は農学部に所属しながら、日本の農業に対しての知識や理解があまり深くない。日本の農業を理解していないのに日本のアフリカへの農業支援について学びたいというのはもってのほかである。これからは、まず日本の農業についての学習に取り組み、理解を深めていきたい。

マケレレ大学での講義や TA の学生とのコミュニケーションはすべて英語であった。私は TA の学生に積極的に話しかけることを心掛けた。TA の学生はとても親切で、専門的な内容について会話する際は、わかりやすい英語で丁寧に教えてくれた。最終的に彼らとは、冗談を言い合って笑い合えるようになり、友達以上の存在となった。このプログラムで実践的な英語力を身に付ける素晴らしい経験ができた。私はこのプログラムに参加する前からある程度英語学習を行っていた。しかし、まだまだ分からない単語、熟語、文法が多く、今までの英語学習は不十分であると痛感した。だから、これから日常生活からなるべく英語に触れて、大学の英語の講義にも積極的に参加し、実践的な英語力を身に付けていきたい。

最後に、このプログラムに参加して感じた自分自身の変化は、今まで自分が持っていた価値観から新たな価値観を持ったことだ。日本にはないような大自然を肌で感じ、動物園にしかない野生動物を間近で見て、日本とは異なる文化を体験し、子供たちと触れ合い、現地の様々な人と会話したことによって新たな価値観を持つことができた。



ウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラム

岡田 侑子 医学部 保健学科 (2016 年度入学)

「研修を終えて」

この研修に参加して感じた自分自身の変化は、日本への興味関心が高まったことです。私の将来の夢は助産師になることで、発展途上国で働きたいと思っていました。ジンジャの公立病院を訪れ、ジャイカの派遣員であるアヤさんからウガンダ人看護師の特徴、ウガンダの医療実態などを聞きました。「日本は発展しているのだから、私は発展途上国でたくさんの人を助けたい」と思っていたのですが、いざウガンダの病院を訪れて話を聞いてみると、「日本もこうであればいいのに」と思う箇所がいくつかありました。私は海外で働く前に、日本でその気づきを実現したいと思うようになりました。

TAの人と話したり、一緒に施設を見学しているうちに、TAさんは自分の国ウガンダのことにとっても関心を持っていて、政治だけでなく、農業、医療、教育など幅広い知識があると気づきました。私はほとんど海外に行ったこともなく、生まれてからずっと日本で暮らしているのにも関わらず、日本のことをほとんど知らずに成長してきたことを痛感させられました。研修中、「日本に帰ったら、もっと日本について勉強したい。日本人として、日本語もきちんと勉強したい」とずっと思っていました。英語を話さなければいけない環境に初めて3週間もいて、確かに英語の必要性をすごく感じました。しかし、それと同時に、日本語のやわらかい音、微妙な表現の仕方、敬語がとても恋しく感じ、日本語が好きだと初めて自覚しました。これから、もっと熟語や敬語を学びたいと思います。

ウガンダでの生活は日本のそれとはまったく違うもので、日本の常識や当たり前は通じないので、いつも柔軟に考えて行動しなければなりません。そのおかげで、小さなことにいちいち気を取られなくなったように思います。また、ウガンダ人のオープンでフレンドリーな性格は私の警戒心を簡単にといたので、私もウガンダ人の性格を見習って、オープンでフレンドリーにしようと思います。

【次に参加を希望する人に一言】

初めはアフリカと聞いて怖いと思うかもしれないけれど、ウガンダはとても素晴らしい国です。ぜひ行ってほしい。一生ものの経験になると思います。



吉村 虹希 農学部生物資源環境学科 (2016 年度入学)

「ウガンダに行って感じたこと」

僕がウガンダのプログラムに参加しようと思ったきっかけは、単純にアフリカに行ってみたくて思ったからです。僕のウガンダに行く前のウガンダ(アフリカ)の印象は子供たちが明るい反面貧富の差が激しそうというものでした。実際に行ってまず驚いたことは、首都カンパラなのにもかかわらず道路にアスファルトが張られていないということでした。そして、交通は乱れていて日本とは全く異なっていました。一方で、僕たちを見て手を振ってくれる子供たちがいるのがとてもかわいらしかったのが印象的でした。

ウガンダのプログラムを通して、いろいろな価値観を持つ人やいろいろな経験をしてきた人から多くのことを学ぶことができました。ウガンダの日本人大使館や JICA などにも訪問させていただきとても貴重な体験ができました。今回のプログラムの中で一番印象に残っていることは、ウガンダの小学校で子供たちと折り紙などをして遊んだことです。やっぱり子供たちの笑顔を見ることができたのが一番うれしかったです。また、歌を歌ってくれたり音楽に合わせて踊ってくれたりしたのもとてもうれしかったです。

はじめてアフリカに行ったのですが日本とは異なることが多すぎてとにかく新鮮な日々を送れていたと思います。シャワーの調子が悪かったり、停電したりなど日本でのハプニングがウガンダでは日常のような感じがしていました。今回のプログラムで得た経験を生かしているいろいろな国に行っても様々な異文化を体験してみたくもなりました。ただ、ウガンダに行って思ったのはもっと英語が喋れていればなということです。英語が喋れたらもっと現地の人たちと触れ合えたらうし、なによりもっと子供たちと普通に会話がしたかったです。なので、次海外に行く機会があればしっかりと英語を勉強してから行きたいです。それだけでなく、母国語も少しはしゃべれるようにしてから行きたいです。今回のウガンダのプログラムに参加していろいろな経験ができたので良かったです。

【次に参加を希望する人に一言】

最初は不安なこともありましたが行ってみると新鮮なことの連続でとてもいい経験になりました。ぜひ、この新鮮さを味わってみてください。

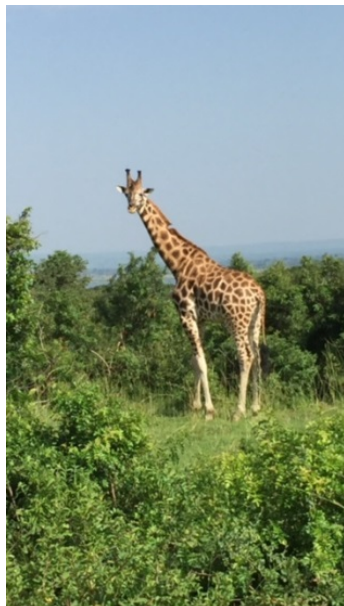


宮里 昭太郎 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

自分はこのプログラムに行く前は日本人がアフリカに対して持っているイメージと同じように治安が悪くあまり栄えていないなどといったマイナスのイメージをもってウガンダに行きました。しかし実際に行ってみると首都カンパラの方はとても栄えていて鳥取よりも大きい建物が多い印象でした。また人柄もよく、にこにこして向こうから積極的に話しかけてきてくれて話しやすかったです。また自分は初めての海外だったため今まで経験したことない出来事やイメージが変わったことが他にも多くありました。ここではその中から特に印象に残ったことを3つ書きます。まず1つ目は食事についてです。食事は事前研修の時から調べたりしてある程度の違いはわかっていた但实际上に食べてみると予想よりも違っていて驚きました。特にお米は日本のお米と違い細長く、パサパサとした食感で日本のお米とは別物で最初はなれませんでした。また現地の主食であるマトケやポシヨといったものはそれ自体に全然味がなく不思議な感じがしました。2つ目は文化の違いです。研修中に中学校を訪れたときに学校側が歌やダンス、お土産など次から次に出し物をしてくれてあまり日本ではないような歓迎をされました。音楽に対する情熱がすごいなと思いました。宿泊しているホテルでは何回も大音量で音楽をかけているのを聞き、文化体験で伝統的なダンスを見に行った時もずっと音楽をかけていてダンスをしていました。日本ではこんなに短い期間にダンスに触れる機会はなかったのもとてもいい経験になりました3つ目は日本製品がとても有名だということです。道を走っている車の八割はトヨタであったり、家電製品もよく知っていました。よく日本製品は海外で有名とは聞いていましたがここまでとは思っていませんでした。このように実際に現地に行って違いを感じることは戸惑いましたが違いを発見することが面白くもありました。改めて日本のことを見つめなおすいい機会にもなりました。現地で日本のことを聞かれて答えに詰まるのが恥ずかしかったのでこれからは日本の文化や政治についても勉強していきたいです。日本について、また英語の勉強などの準備をして他の国に行き、日本ともウガンダとも違う所を見つけてみたいです。

【次に参加を希望する人に一言】

あまり行く機会がないアフリカで現地の小中学生との交流や国立公園見学など他のプログラムとは少し違ったとても良い経験ができるので是非行くべきだと思います。



嵯峨山 透子 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

「ウガンダに触れて」

研修に参加して、私は様々なところを訪れました。歌や踊りが大好きな子供たちの通う学校。病気を患い、助けを求める患者さんが行く病院。ウガンダの大切な産業の 1 つである農業に関わるいくつかの施設。ウガンダの自然であるナイル川や国立公園にも行きました。私が見たウガンダの環境は日本と異なり、いい意味で不完全さが残る現状でした。というのも、ウガンダは農業、工業、医療、様々な分野において多くの可能性があることを感じたからです。私にとって印象的だったことは、“improve”、“change”という言葉が現場の人から聞いたことです。研修で JICA ボランティアの看護師の方が働くジンジャの病院を訪れ、産婦人科の一連の流れを拝見しました。日本とは違い、施設には大きな差が見られました。衛生面、病室の様子、施設の広さなど。案内をして下さった婦長さんの話からは、ポジティブでこれからさらなる向上を目指す様子が感じ取られ、印象に残っています。

ウガンダとウガンダを支えている人々の前向きさには非常に感動しました。ウガンダでは、そのような人と話す機会が何度かありました。3 週間という研修の中で、少しずつですが人との会話を純粋に楽しんでいる自分がいたように思います。特に、私たち鳥取大学の学生と研修プログラムを共にしてくれた TA の方とは、たくさんお話ししました。楽しく、たわいもないことで笑いあったことは最高の思い出です。

研修後、やはり今まで以上の語学力の向上と自分が学んでいる農学分野の勉強を頑張りたいと思うようになりました。語学力に関しては、もっと自分の思っていることを相手に伝えて、もっと会話を楽しみたいです。農学分野の勉強は、ウガンダで見た農業の重要性が印象的で、私が学ぶことをどこかに還元できたらなと感じ、大きなモチベーションが生まれました。他に、もともと海外と関わる仕事がしたいという自分の想いがより強くなりました。今後、海外に長期間留学する機会がありましたら、ぜひ行ってみたいと思います。

最後に、ウガンダに行って、人に出会えてよかった。

【次に参加を希望する人に一言】

何か楽しそう、ウガンダに行ってみたい、少しでも興味があったら一歩踏み出して参加してみることをお勧めします。自分の意志で選んだことは、自分に対してプラスの効果しかもたらさないと私は考えています。



細井 果奈 医学部 保健学科 (2016 年度入学)

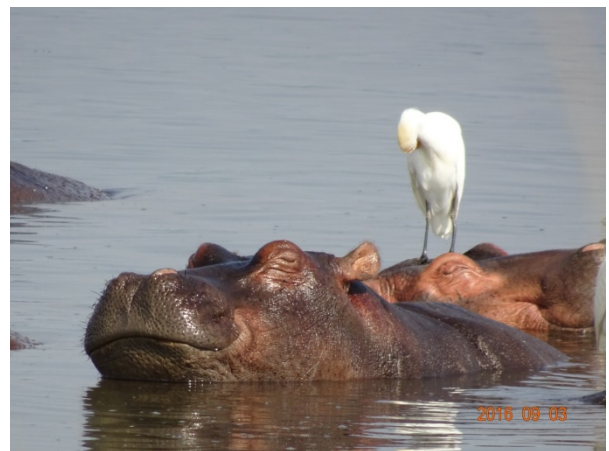
「行って見てわかること」

今回の研修で多くのことを学びました。研修に行く前まではウガンダという国を途上国の 1 つとしてしか捉えられていなくてきっと色々なことがまだまだであるという先入観がありました。しかし、実際行ってみると全然想像と違うものばかりでした。訪問した病院では家族計画という主に避妊の方法の普及によって女性に子供の数を考え直してもらおうという講習のようなものが開かれていました。ウガンダの女性 1 人が生涯の間に産む子供の数の平均は 6~7 人もいるが、産んでもお金がなくて全員に教育を受けさせることができないなどの問題があったので産む子供の数を少なくして親が子供全員をきちんとケアできるようにしようというものです。これらの動きもあって避妊方法はだんだん普及しているそうです。日本でも家族計画はありますが病院ではされていませんしここまで力を入れて行われていなかったのが驚きました。また、大学で受けたウガンダの農業システムの講義でウガンダには今携帯電話を使った Mobile phone system や Innovation platform system など国民の 70% もいる農家の収入を上げるための問題解決システムがすでに普及し始めていると学びました。私はこれらのことからウガンダという国は課題はまだたくさんあるが、すでに現状を見据えて改善していくために動き出している国であるという印象を受けました。一口に途上国といっても国や地域によって発展の度合いはもちろん変わってきます。そのような当たり前のことに今回改めて気づかされた気がします。

事前研修でいろいろなウガンダの情報についてインターネットを使って集めていてウガンダのことをだいぶ分かっている気になっていましたがそれらは事実のほんの一部でしかなく大部分は自分で足を運んで自分の眼で見ることでしか分からないことばかりなのだと感じました。この先も様々なことをインターネットで検索したり、人から聞いただけで決めつけてしまうのではなく、実際に自分の足で行き自分で見て学んでいきたいと思う。

【次に参加を希望する人に一言】

できるかできないかではなく、やるかやらないかだよ



三谷 真鈴 地域学部 地域環境学科 (2014 年度入学)

「ウガンダで学んだこと」

今回このプログラムに参加した理由は、グローバルな考えを身につけ異文化に触れたいと思ったこととアフリカに行ってみたかったからです。そして、ウガンダに行く前のウガンダのイメージはインフラが整っておらず食事もおいしくないというマイナスなイメージからのスタートでした。しかし、実際に行ってみると首都カンパラはビルも高く想像以上に都会でほぼ不自由を感じることなく生活できました。ウガンダの国民性なのか人々はゆっくり歩いていてゆったりした時間を過ごすことができました。また気温も赤道直下の国にも関わらず涼しくて快適に過ごすことができました。

私たちは、小中学校の訪問や JICA、大使館、砂糖工場、国立公園、ナイル川、様々な場所行きました。その中でも特に私は小中学校の訪問が印象に残っています。最初は恥ずかしそうにしていた子供たちも私たちが日本のプレゼンやアクティビティをしているうちにすごく近づくに来てくれて「日本語教えてほしい!!」「日本ってどんな国?」などと日本のことを興味深そうに聞いてくれたのでうれしかったです。この触れ合いの中で子供たちの笑顔を見てアフリカはまだまだ成長すると感じました。そして、そんな元気のあるウガンダという国がとても好きになりました。しかし、この小中学校訪問の際自分が日本のことについてうまく答えられないことが多々ありました。自分の思っている以上に私は日本のことを理解しておらず英語力のなさも実感しました。もっと日本について勉強し外国の人たちの言っていることを理解し、自分の伝えたいことをうまく伝えられるようになりたいと思いました。日本へ帰って英語の勉強を頑張りたいと思います。

この3週間で少しですが発展途上国の抱える問題を見ることができました。しかし、日本も見習うべきことが多くあると感じました。行って初めて知ることがたくさんあったのでこれからも海外へ積極的に行き、様々なことを吸収したいです。

【次に参加を希望する人に一言】

行ったら絶対楽しいです!!



柴原 新弥 農学部 生物資源環境学科 (2014 年度入学)

今回の研修では、マケレレ大学でウガンダの文化、農業、歴史を学び、日本大使館や JICA の施設を訪れて国際協力のことを学んだ。その中で、ウガンダのみならずアフリカの国々は大きな発展の可能性を秘めていると感じた。このプログラムに参加する前は、アフリカの国々は発展が遅れているイメージしか持っていなかったが、今回の研修で若者の数が非常に多いこと、それに伴って人口増加の兆しが見られ市場展開のポテンシャルを持っていることを学んだ。現在は子どもたちがお金をねだってくるほど貧困に苦しんでいる家庭が多く存在しているので、中国やインドの企業がアフリカに目を向けているように、今後様々な国がアフリカに目を向け、アフリカが発展していけばいいと思う。

また、学業に対してもっと貪欲になるべきだなと感じさせられた。我々が派遣されたマケレレ大学はアフリカ大陸ではトップクラスの実力を誇る大学である。しかし、マケレレ大学の卒業生の企業への就職率は 30%程度だという。数多く生まれてくる子どものうち、ほんの一握りが大学まで進学でき、その中のほんの一握りしか企業に就職できないことを学んだ。狭き門へ挑戦するアフリカの大学生の姿勢を自分も見習い、新しいことにどんどんチャレンジしたり、自分のためになる知識や経験をたくさん吸収し、積み重ねていきたいと思えた。

そのチャレンジの第一歩として、英語力のさらなる上達を目指したいと思う。ウガンダを訪れる前にも英語の勉強は行ったが、力不足で中々自分の言いたいことを言えなかったり、相手のいうことをすぐに理解できなかったりして悔しかったし、自分よりも現地の人たちとコミュニケーションを取れている人を見てとてもうらやましかった。将来はコンサルタント会社に就職して海外で活躍出来たらいいなと思っているので、その目標が達成できそうになった時に手遅れにならないように、今のうちからしっかりと英語を身に付けておこうと思う。

【次に参加を希望する人に一言】

日本ではできない経験、得られない刺激をこのプログラムでは味わうことができます。留学制度を利用し、同じ志を持つ仲間とアフリカで過ごす日々はとても充実し、楽しいものになると思います。精一杯、余すことなく楽しんでください。



天野 成 農学部 生物資源環境学科 (2014 年度入学)

今回初めて学校からのプログラムに参加し、自分の中にも様々な変化があった。まず一つ良かった点は、自分で行く旅行では JICA や大使館、現地の病院や農業研究所といった公的機関にはなかなか行く事が難しいが、学校からの留学ということでそれらの機関で働く日本人の話を聞く事ができた。今まではそのように海外で活躍している日本人が存在していることは知っていたが、実際に何をしているのか、どのような生活環境なのかなど具体的な話を聞く機会はなかった。今回の3週間の滞在中に海外青年協力隊で看護師として派遣されている女性や長年アフリカで稲を普及する活動を行われている人に直接質問をし、意見を言うことが出来た。それにより、今までよりも明確に自分が将来海外で働くというビジョンを描く事ができるようになった。

また、語学力に自信を得る事もできた。私はこの留学前にも約 10 カ国の国に自分で旅行しており(ボランティア、短期留学、バックパッカー等)その時々でどうにかコミュニケーションをとるために英語を話していた。なので、英語を話すことに対する抵抗はなかったがきれいな文章で話すことはできなかった。今回はマケレレ大学での講義もあり、ウガンダの公用語が英語であることから講義も英語で行われた。そこである程度講義の内容を理解した上で、自分の意見を言う事もできた。さらに留学の最終プレゼンテーションの発表内容を英語での授業で習ったウガンダの農業システムについて発表したところ優勝する事ができた。英語による理解をした上で自分なりの意見を上手くまとめて発表し、それが良い結果に繋がったことは留学の大きな収穫といえる。

しかし、自分の理解できる分野ならまだしもあまり関心のない政治や宗教の話になると全く話を掘り下げることができないことも痛感した。小学校に訪問した際、各テーブル生徒約 10 人に対して私たち日本人留学生が一人ずつ座り、生徒から日本について質問を受ける時間があつた。そこで真っ先に聞かれた質問は日本の首相は誰かであった。その後も私には上手く返答できない質問ばかりが続き、不甲斐なかった。海外でのコミュニケーションは日常会話が出来ただけではいけないことを教わつた。普段からニュースや新聞を見るなど少しでも知識を蓄えるよう心掛けようと思った。

また、今年から私は共同獣医学科から生物資源環境学科に転学科したのでアフリカの農業についてもとても興味があつた。自分の目に焼き付けてきたものをこれからの後期からの授業にも活かしていければ良いと思う。

【次に参加を希望する人に一言】

どの学科の生徒も満足できる充実したプログラムだと思います。また、授業だけでなくアクティビティやアフリカの文化も存分に体験出来るのでおすすめです。



夏期カナダ英語研修

国・地域:カナダ

研修機関:ウォータールー大学

参加者数:18名

期間:2016年8月7日(日)~9月1日(木)

内容:カナダ・ウォータールー大学にある Renison University College で、約4週間の英語研修を行いました。1日5時間の英語の授業で集中的に学習し、英語の実践的な能力を磨けるプログラムになっています。プログラムには夕方のアクティビティや週末のナイアガラファールズ・トロント等への小旅行も含まれているのでカナダの文化や自然に触れることもできます。

また本プログラムにはいろいろな国からの学生が参加しますので、国際的な友達作りにも良い機会です。初級から上級までの5つのレベルにクラス分けを行うため、初心者でも安心して参加できるようにしています。



岩根 侑 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

語学研修に応募する前は、英語を話した経験がほとんどなく、自分の英語力に自信が持てず、英語の授業などでも消極的になってしまっていた。英語を話す機会がない分、英語自体は好きでも自分で英語を勉強することについては疎遠になっていたが、大学生のうちいろいろな経験をしたと思い、研修に応募した。カナダに行くことが決まってから、大学の授業のための勉強と並行して自分なりに少し英語を勉強し、改めて英語を勉強することが楽しいと感じた。

3 週間の語学研修の中で、最初はなかなかスムーズには英語で会話できず、相手が話したことを聞き返してしまうことがよくあったが、だんだん英語を話すことに慣れてきて比較的シンプルな英語であれば相手から質問されても聞き返すことなくスムーズに会話することができるようになった。スムーズに会話できるようになってから、英語で会話することが楽しいと感じるようになり、心に余裕ができた。そして、もっと的確に自分の言いたいことを英語で表現できるようになりたいと思い、英語学習に対するモチベーションがさらに向上した。

海外に行くことが初めてで、今までは海外に対して少し恐怖心を持っていたが、3 週間でいろいろな人に出会って、外国に対しての興味がさらに沸いてきて、もっと他の国のことも知りたい、行ってみたいと感じるようになった。

3 週間の研修の中で出会った人たちから、あらゆることに目を向け、探求心を強く持つことが自分の可能性を広げる秘訣であるということを知った。英語だけでなく自分の母国語以外の言語を独学で習得している人と出会い、その人と話をしていて、その人の探求心の強さを強く感じた。そういった部分が自分には足りないのだろうと思い、それに気づいてから物事に対して常に深く追及することを忘れないようにしようと努めている。研修を通して、英語の能力を伸ばすだけでなく、自分がどんな人間であるか、何が足りないか、など自分のことについて改めて見直すことができた。

この語学研修で得た経験や感じたことを無駄にせず、今までの自分からもっとステップアップできるように、これから今まで以上に英語の勉強も、大学での自分の専門分野の勉強も、その他のことも努力していきたい。



栗谷 和希 工学部化学バイオ系学科(2016 年度入学)

今回の語学研修で私はさまざまな貴重な経験をしました。中でも特に体験できてよかったことを3つほど紹介したいと思います。

一つ目は日本の受験や勉強における英語と本場の英語との違いを肌で体感することができたことです。何が違うのかというとやはり喋る速さが違いました。店員に食べ物の注文をするとき会話をしますが、全く聞き取れませんでした。何度も聞き直しジェスチャーなどをして、注文できたと思ったら違うものが出てきたり、またそのことで店員と会話をするようになってひと悶着あったり、とにかく大変でした。また単語の音節の区切りが分かりづらく、すごく滑らかに発音していたことも何を言っているのかわからない原因でした。しかし、この研修で話しているうちに結構聞けるようになったので、やはりこの研修に参加してよかったと思いました。

二つ目に、日本には当たり前のようにあるモノがカナダにはない、つまりカルチャーショックを体験できたのも良かったです。私が一番驚いたのは自動ドアがないことでした。日本では当たり前のようにどこにでもある自動ドアですがカナダは手動のものばかりでした。最初私は障がいのある人に不親切だなあと感じていましたが、よく見てみるとボタンがあり、そこを押すとドアが開く半自動ドアを採用していました。なぜそのドアを採用したのか最初疑問に感じていましたが、カナダで生活しているうちに分かってきました。観察してみると最初にドアを通った人で後ろに人がいると最初の人が後ろの人が通るまでドアをもっています。つまりレディファースト的な親切精神がカナダにはあり、見知らぬ人にも親切であるということが分かったのです。これは日本にはあまり見られないことで見習うべきだと思いました。

三つ目はやはり食文化の違いです。カナダでは圧倒的にファストフードを食べることが多く、体重が増えました。食堂には毎日ピザ、ポテト、ハンバーガーがあり、野菜やお米もあったのですが全くおいしくなかったです。あと水の値段が高かったです。カナダを見渡すと4割は太った人がいた気がするのですがこういう食文化だからだろうなと思いました。

最後にカナダに来ていろいろなことを経験することができました。この体験を今後にかかしていきたいです。



カナダでの食事



カナダの半自動ドア

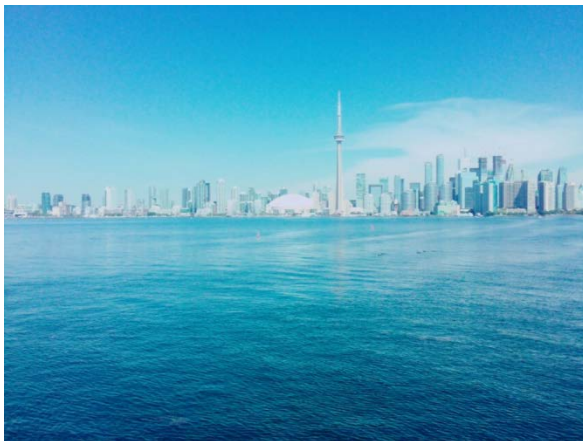
一藤 基子 農学部生物資源環境学科(2014 年度入学)

カナダに語学留学をして私は変わったと自信をもって言うことができます。

まず言えるのは積極的になれたということです。今まで自分の英語に自信がなかったので発言することがなかなかできませんでした。間違ふこと＝恥ずかしいと思っていました。しかし教室にそのような雰囲気は一切なく、常にたくさんの意見が飛び交っていました。私が驚いたのは日本以外の国からの留学生たちの発言量です。みんな自分の考えをすぐに発信していて、そこには間違ふことを恐れているような様子は全くありませんでした。そんな姿を見てたくさんの勇気をもらいました。一生懸命発言をすれば、一生懸命聞いてくれる仲間や先生がいました。そして発言だけでなく、コミュニケーションをとる手段も英語しかないので英語で話すことに対するハードルがどんどん下がっていきました。英語の世界で生活していたので何をすることも一生懸命聞いて、一生懸命話しての繰り返しでした。常に英語と全力で向かい合うことができたと思います。しかし、語学力が向上したとを感じる部分もある一方で、自分の思いを伝えきることのできない悔しい思いもたくさん経験しました。私の語学力はまだです。カナダで学んだ経験は、これからも英語を学んでいく上での原動力になると思います。

そして勉強以外にもたくさんの体験をしました。トロントの CN タワーやナイアガラの滝などカナダの有名な場所にも行き、自分の目で見て感じることができました。感動の連続です。学校のプログラム以外にもトロントへの小旅行を自分たちで企画したこともありました。カナダで一番大きい大冒険になりました。新しいことに挑戦する楽しさと緊張感をたくさん味わうことができました。

カナダでは目にする全てのものが見たことのないものばかりでした。毎日が発見にあふれていて、毎日が出会いの連続でした。カナダに行かないと絶対に出会えなかった友達もたくさんできました。「カナダ」というパーツが私を構成する一部になり、見える世界や考え方も少し変わったように感じます。カナダで過ごした 1 か月は宝物です。素晴らしい環境と素晴らしい仲間と素晴らしい先生方に本当に感謝しています。学校をさるとき「迷っていたけれどカナダに来ることができて本当に、本当によかった」と心から思いました。



岡本 珠里 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

今回の夏期カナダ英語研修では、ウォータールー大学のレニソンカレッジで月曜日から金曜日まで毎日 5 時間英語の授業を受け、授業毎に出された課題を放課後にしていました。授業では、リスニング、スピーキング、文法、プレゼンテーションなどを学びました。先生はおもしろく、授業も日本で受ける英語の授業とは異なり、クラスメイトと英語で話す機会がたくさんあったのでとても楽しかったです。また、クラスメイトには、中国やサウジアラビアの方がいたので、様々な英語の発音を聞くことができました。母国語が英語でない国の人の発音は、ネイティブの方の発音よりかなり聞き取りにくく、自分のリスニング力の低さを痛感しました。

プレゼンテーションの授業では、10 分間の最終プレゼンがあり、私は日本の花火大会について発表しました。原稿もスライドもすべて英語で、日本の文化について外国の方に紹介するという貴重な経験ができてよかったです。

カナダに行って、初めはお店などで店員さんに言いたいことをなんとか伝えることはできても、何を言っているのか聞き取れないことが何度もあり、英語力のなさを痛感しました。また、英語で話すことに抵抗感がありました。しかし、授業で先生や外国人の友達の英語を聞いているうちに、相手の言いたいことを理解し、聞き取ることができるようになってきたことを実感しました。英語を話すことについても、自分の言いたいことを英語で伝えるのは難しかったのですが、先生や外国人の友達に英語で話せるようになり、英語で話すことに対する抵抗感は少なくなりました。

今回のプログラムに参加して、英語力のなさを痛感し向上させるために努力したこと、海外という慣れない環境で生活したこと、見知らぬ土地でバスや電車を利用して出かけるなどアクティブに行動したこと、外国人の友達と積極的に交流したことなど、日本ではできない多くの経験を通じて自分自身の弱さに気づき、成長できたと思います。カナダで学んだことを自分の力にできたので、これからも継続して英語の勉強をしていくことはもちろん、この研修で得た多くの経験を無駄にすることなく、将来に役立てていきたいです。



佐伯 猛 工学部社会システム土木系学科 (2015 年度入学)

“Don't be shy.” これはある先生が最後まで言い続けていた言葉だ。私のクラスメイトには日本、中国、サウジアラビア、トルコなど様々な国の人がいた。最初、授業中先生の問いかけに答えているのはいつも日本人以外だった。日本人は他の国と比べて授業への積極性が全く足りないと感じた。間違えるのを恐れすぎている気がした。しかし、この先生の言葉が私たちの積極性を徐々に生み出してくれていた。意識を少し変えれば、人間性もすぐに変えることができるということを先生やクラスメイトから学ぶことができた。授業が問いかけや応答、質問などであふれて賑やかであると、自ら学んでいる気がしてとても楽しかった。こんなにも授業が楽しく感じることは今までなかった。このすばらしい経験を日本へ持ち帰り、もっと多くの人にこの経験を共有したいと思った。

研修を通して私は話す力が足りてないように感じた。自分の伝えたいことがすぐに発言できず困ったことが幾度もあった。終わりに近づく少しは簡単に発言できるようになっているのは感じたが、満足できるほどではなかった。普段から英語を使う練習をしなければすぐに研修の成果が無駄になってしまうので、日本に帰ってからも英語で映画をみるなどして積極的に英語に触れていきたい。

今回海外に行ったことで最も日本では経験できないであろうことは、外見では判断できない人間性であると思う。カナダに行くとき多くの人がピアスをしていたりタトゥーが入っていたりとそれが普通であるように感じた。最初タトゥーが入っている人を見ると少し恐ろしく感じた。しかし、タトゥーが入っているからといって皆が悪い人ではないということを学んだ。店に入ると奇抜な髪の色とたくさんのタトゥーが入っている店員さんがいたが、とても優しく接客してくれ、定期的に周ってきてくれて味はどうかなど気配りもしてくれた。日本では外見を重視するためこの光景を見ることはまずないだろう。しかし、カナダに行ってこの光景をいずれ日本でも見られる時がくればいいなと感じた。タトゥーを入れれば良いというわけではなく、個人の自由を尊重する社会、外見で人を判断しない社会をつくりあげるべきだと思った。良い意味で他人の目を気にせず過ごすことができる海外に魅力を感じた。



坂井 駿之介 工学部社会システム土木系学科 (2015 年度入学)

「カナダ英語研修を終えて」

私は、今回の夏期カナダ英語研修を通して多くの自分にとって新たな経験をした。その量は留学前の創造を凌駕するほどであった。中でも大きく分けて三つの事象が印象に残っている。

一つめは、研修中常に感じていた英会話力、あるいはコミュニケーション力である。もともと英語は得意ではなかったが、現地での英語はリスニングとスピーキングが基本となっていてリスニングが少しできたとしてもスピーキング、つまり応答ができなければ会話は成り立たず自分にとっても相手にとっても難しい状況に陥ると痛感した。研修中にフランス人の友人ができた。彼女の方から積極的に話しかけてきてくれ、彼女に比べてたどたどしい英語を話す私にも彼女はとても優しく、理解しようと努めてくれた。私はその行為がとてもうれしかったが、同時に自分の無力感も痛感した。ジェスチャーを交えることである程度の対話は成立するものの、やはり英語による言葉のキャッチボールなくしては本当に自分が伝えたいことも正確には伝わらないと実際にそう感じた。この対策としてリスニング力はもちろん、語彙力とスピーキング力を向上させたい。そしてまた彼女にあうことがあれば、その成果を発揮しお互いが楽しんで会話をしたいと思う。

二つ目は、海外における合理性、またはシステマティックな部分である。日本にはあまり存在しないもので、おそらく海外特有の考え方が生み出したものだと思う。いたるところでは感じられた。例えば私たちが泊まっていた寮の各部屋には冷暖房の設備はなく、おそらくそれは留学生を部屋に閉じ込めさせず、冷暖房のあるラウンジなどに出させほかの留学生と交流をはからせる意図があった。また、他にも気づいていない部分でも合理的なところがあったのではないかと推測する。そういった面から私は、実際海外に訪れてみないと感じる事が不可能であろうことに触れることができた。

三つめは、食文化に関する経験である。カナダに行ってから知ったことなのだが、カナダには伝統的な食事はほとんどなく、私が実際口にしたのは「プーティーン」というポテトフライにグレイビーソースとチーズがのったものだけだった。やはり文化の違いを感じるものとして、言語の次に食だと感じた。研修中の食事は日本食とかけ離れてヘビーなものが多かったがあまり苦ではなく、むしろ食べ応えがあったので個人的にはとても満足している。

研修期間の約三週間は初めての海外ということもありとても有意義な日々を送ることができた。とても密度の濃い三週間だった故、日本に帰ってからの刺激の少なさに失望するかもしれないが、自分の中での意識を切り替え日本での生活も有意義なものにしたいと意気込んでいる。そして、また海外に訪れたときには新たな経験を積めるよう、これからは自分のあらゆるスキルを磨いていきたいと誓う。

山田 雅人 工学部 電気情報系学科 (2015 年度入学)

カナダ研修はなによりとても充実したものでした。平日は5時間ほどの授業に加え、授業後も様々な国から来た学生と交流できるゲーム、映画などのアクティビティがあり、週末にはナイアガラの滝などへの観光旅行。毎日とても疲れましたが、大変濃密な時間を過ごすことができました。また、アクティビティや観光は全て研修先が企画、準備をしてくれ、特に観光では現地の人が付いていてくれる安心感からトラブルを心配することなくゆったりカナダを満喫することができました。

研修の主眼である授業は、英語だけで行われる上、日本で受けているような授業よりもプレゼンなどの個人の主体的な参加が求められるもので最初は緊張しました。しかし、文章が出てこなくて困っていても適切な表現を教えてくれたりと、丁寧なサポートをしてくれたおかげで、すぐにリラックスして参加できるようになり、最後には積極的だったと評価されるまでになりました。

また、当然ながらカナダで日本語は通じないので、研修以外でもレストラン、買い物などでも英語を話さなければなりませんでしたが、学校を離れた実地で自分の英語が伝わった時の喜びは日本では味わえないものでした。

この研修で英語が上達したかと言われると、英語ができるようになったという感じは正直あまりありません。とりわけTOEICの点が取れるようになったような事はないように思います。しかし、英語以外では意思疎通ができないという環境に身を置いたことで、複雑な文法、構文を使って言いたいことを一文に纏めようとするよりも、簡単な文章をいくつも使って話すというような、下手ながらもとにかく伝える英語が身についたと感じています。これは日本語の通じない異国へ行ってこそ学べたものだと思います。

また、様々な場面でカナダと日本との違いを感じたり、アラブから来た学生との話から日本とは異なる常識に気づかされたりしたのも外国での研修ならではの事だったと思います。英語力に自信の無かった私が一人で外国へ行ってみてもこのような深い体験はできなかったでしょう。

今回の研修で、とりえず英語でコミュニケーションをする自信がつけることができました。今後は外国人の方と積極的にコミュニケーションを取って行きたいですし、機会があったら一人で外国に行ってみたいとも思っています。

鮎川 優 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

私は今回の夏期カナダ英語研修で 3 週間カナダに滞在した中で、あるフレーズが印象に残っている。それは、「Don't be shy.」というフレーズである。この言葉は、英語の授業の中でも、また、日常生活でも、私を成長させてくれた魔法の言葉であった。

この研修では、研修の終盤に授業の集大成として 10~15 分程度の英語でのプレゼンを行った。私はこんな長いプレゼンが初めてであり、英語で 10 分以上すらすらと喋れるのかとても不安であった。そのとき授業の先生が「Don't be shy.」とおっしゃっていたのを思い出し、すらすら上手く喋れなくても、自分に自信をもってプレゼンしようと心に決めてプレゼンの準備を進めた。プレゼンのテーマは自由だったため、私の趣味である「写真」についてプレゼンすることにした。自分の好きな趣味なら自信をもって喋ることができると思ったからだ。プレゼンの本番でも「Don't be shy.」の気持ちをもって挑んだ。プレゼンが終わった後は、「外国で、様々な国籍を持つ人々の前で、英語で自分の思いを伝えることができた」という達成感で胸がいっぱいになり、この研修での大きな経験になったと感じた。

今回が初海外出会った私にとっては、日常生活でも、恥ずかしがらずに積極的に行動しなければならぬ機会が多くあった。特に、週末のアクティビティで外出した時は、道や、レストランでの注文の仕方などを現地の人にたくさん聞いた。その中で最も印象に残っているのは、洋服店で洋服を買った時である。洋服を買うときは、どんな服を探しているのか、欲しい服の他のサイズがあるか、そして試着してもいいかなど、店員の方に尋ねる機会が特に多かった。私は買い物で失敗したくないと思って、下手な英語でも恥ずかしがらず、何が欲しいのかを店員の方に必死に伝えようと努力した。店員の方が私の気持ちを汲み取ってくださったおかげで満足のいく買い物ができる。

この 3 週間で、自分の英語でのコミュニケーション力の低さをしみじみと感じたが、それでも恥ずかしがらずに自分の思いを伝えることが大切だということを学んだ。この「Don't be shy.」の精神は、帰国してからも、大学での授業や、将来職に就いたときなどに活かせると思っている。



Figure 1 Toronto Eaton Center



Figure 2 My Class

山本 航平 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

今回の夏期カナダ英語研修に参加してえられた変化、経験また改善すべき点やこれから挑戦してみたいことについて述べたいと思う。

この研修では、平日 1 日 5 時間の授業、週末と放課後のアクティビティが主な内容である。授業は、プレゼンテーション、リスニング、スピーキングの能力の向上のためのものであった。

ある問題に対してのディスカッションの時に自分の考えた意見を英語で伝えること、相手の意見を聞きグループの中でまとめることが難しかった。自分の意見を持つことそしてその意見を自分の英語で相手に伝えるにはどのようにすればいいのかを考えるようになった。

プレゼンテーションの授業では、良いプレゼンをするためには何が必要なのかを自分たちで考え授業で話し合い、それらを踏まえて最後のプレゼン発表に臨んだ。

エッセイやプレゼン、ディスカッションなどをした後には先生が一人ひとり改善点や良かった点を教えてくださるので上達しやすかったと思う。他の国の人は積極的に発言をしていたことが印象に残っている。

アクティビティは珍しい体験が多くできた。ラフティング、ジップライン、ミニゴルフなどカナダの雄大な自然を感じ、ワンダーランド、ナイアガラ、トロント観光に行くことができた。どのアクティビティもとても楽しくいろいろな人と仲良くなれるイベントであった。

改善すべき点としては、より多くの海外の人たちと話すためにはもっと英語で会話することになれてからいくことが必要だと思った。レベルの高いクラスになればなるほど多くの海外の人と話す機会があるからである。

はじめての海外語学留学で緊張もあったが、一緒に行く仲間がいるので心強く、過ごしやすい気候で体調を崩すこともなく過ごすことができた。

今回の留学でとても貴重で刺激のある経験をたくさんすることができたが、英語を使って話すことに対して積極的になれたこと、海外の人とコミュニケーションがとれたことが特に参加してよかったと思う。これからも、自分の英語力を高めて、また別の英語圏の国に行ってみたい。



アクティビティでナイアガラの滝にて



スクールバス

長渡 麗歩 医学部保健学科(2014 年度入学)

私は、外国に興味がありませんでした。なのに、なぜこの企画に参加したのかというと、働いたら長期間も外国に行けないこと、英語ができない自分にとっていい機会なのではないのかと思ったこと、日本人特有の静かで恥ずかしがり屋の自分を少しでも変えたいと思い、参加することにしました。実際、カナダに来てみると、日本人が本当に多くて、これは自分にとって意味のある留学なのかと疑うことが多かったです。しかし、英語を上達させたいなら、自分の恥ずかしがり屋な性格を直したいのなら、自分をもっと積極的に外国人と関わりを持ちにいけないということを学ばされました。しかし、実際に外国人とお話をさせてもらうと相手が何を言っているのか分からないし、分からないのでなんて返せばよいかも分かりませんでした。結局日本人と話すのが一番楽で、自然と外国人と話すのを避けることも多かったです。でも、外国人の方とうまくコミュニケーションをとれたら、すごく楽しかったです。だから、もっと英語が上達している人は外国人の人と話すのがもっと楽しいのだろうと思いました。私もそんな人たちのように楽しみたいと思うようになりました。次、うまくコミュニケーションがとれなかったけれどかわいかったフランス人がいるフランスとナイアガラの滝で行きたかったけど断念したアメリカに行きたいので、自分が本当に苦手だと身に染みて感じたリスニングとスピーキング力を上げてもっと上手に外国人の方とコミュニケーションをとりたいです。

あともう一つすごく感じたことがあります。実は、カナダ研修の最中にいろいろショックな出来事が立て続けにありました。それを立て直すのがすごく難しかったです。本当は家族に相談したかったのですが、国際電話をする勇気もなくて諦めました。ルームメイトや鳥取大学の友達が支えてくれたりしてなんとか耐えることができたけど、本当につらかったです。しかし、辛い中でこれからの将来の夢とか新たな発見も含め考えさせられたのでとてもよかったです。日本の友達がいたから良かったけれど外国人しかいなかったらもっと大変なことになっていたと思うので、日本の友達には感謝でいっぱいです。

以上のことから、今回の夏期カナダ英語研修では、自分にとって外国への興味が湧いたのと、将来のことについて改めていろいろ考えさせられた良い機会になりました。

國岡 順子 医学部医学科(2016 年度入学)

夏期カナダ研修を通して、授業、放課後のどちらにおいても学ぶことがあったと思います。

まず、授業面では、ネイティブスピーカーの先生による授業で、すべて英語で行われたため、リスニング力が向上したと思います。一方、日本以外から来ている学生の英語を聞き取るのは難しいということに気づきました。母国語のなまりがあるからです。日本語にはない発音なので難しいですが、英語の発音は舌をうまく使って発音しなければなりません。私も、発音の練習をしなければならぬと感じました。また、日本だけでなく、台湾、中国、メキシコ、サウジアラビアから来た学生もいて、彼らと話したり、彼らのプレゼンを見る中で、様々な考え方や文化を知ることができました。また、英語でディスカッションしたりプレゼンを行ったりしたので、人前に立つ良い経験ができました。

一方、放課後はアクティビティに参加したり、自分たちで出かけたりしました。友達に情報を教えてもらったり、先輩方と協力しながら、バスに乗ったり、地下鉄に乗ったりしました。初めての土地でも公共交通機関を乗りこなすことができ、自信につながりました。アクティビティはスクールバスで現地に連れて行ってもらえるので楽ですが、振り返れば、バスや電車を乗り継ぎ協力し合って目的地まで行ったことも、いろんな体験ができて楽しかったです。また、美術館や空港で挨拶をすると、ためになる情報を教えていただけたりもしました。例えば、美術館に学生カードを使って無料で入ることができたりしました。挨拶や積極性が重要だということも改めて学ぶことができました。

研修前の海外安全マネジメントでも、様々な学びがありました。印象に残っている言葉は、楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実行するという言葉です。これは海外だけでなく日常生活でも必要なことだと思うので、この言葉を大切にしていきたいと感じました。この研修を今後に生かしていきたいです。



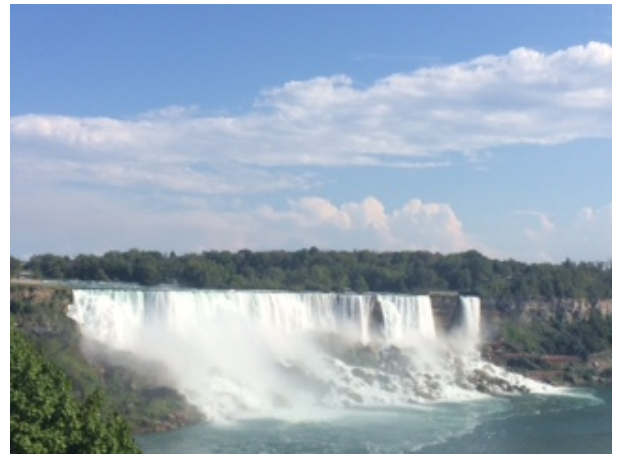
鐘築 千晶 医学部保健学科(2014 年度入学)

以前から英語や海外に興味があり、約一か月間海外に身を置いてしっかり英語を勉強してみたいな
と思い、夏期カナダ語学研修に参加しました。授業はレベル別に分かれて行うので、英語が得意では
ない私にとっても一か月間続けられる丁度いい授業でした。授業はすべて英語なので最初は今からや
る内容でさえ聞き取れず、最初は不安でしたが、先生は優しく、また、一クラス 20 人程度の少人数だっ
たので、質問しやすかったです。授業ではプレゼンテーション、ディベート、スピーチ、ゲーム、文法、英
語を話す際に気を付けること(抑揚、強調)、日記、スキット(寸劇)、ジェスチャーなどたくさんのことを
学びました。日本の授業では学ばなかったことばかりでとても新鮮でした。

私が一番印象に残っている授業はプレゼンテーションです。ただ、英語でプレゼンをするだけでなく、
プレゼンをするときに気を付けることは何があるかをクラスのみinnで考えました。聞き手とアイコンタ
クトをとること、ジェスチャー、間の取り方、大事な部分を強調すること、表情など、聞き手により伝わる
ように工夫することがたくさんありました。英語を話す際に、淡々と話すのではなく、いろいろな工夫をし
て相手に伝えようとする気持ちや姿勢が大切だなと思いました。そう思ってから、そのことを意識して
海外の人と話すようにしました。海外の人と話すのはとても楽しかったですが、英語が得意ではないの
で日常会話でも言いたいことが言えなくてもどかしい気持ちになることが何度もありました。ゆっくり考
えたと話せる内容でも会話は進んでいくので、結局話せないことが多かったです。反射的に思っている
ことを英語で言えるようになりたいと思いました。このもどかしさをばねに英語の勉強を続けていきたい
なと思いました。

放課後や週末にはアクティビティが充実しています。違うクラスの学生と交流できたり、カナダの自然
を満喫することができました。バスで 2~3 時間かけてトロントまで行ったり、海に行ったり、ナイアガラの
滝を見に行きました。比較的フリーな時間が多く、自分たちだけで行動することが多かったです。カナダ
で買い物をするときや、食事をするとき、英語を使う機会が多く、アクティビティ中でも英語の勉強になり
ました。

今回の研修に参加し、とても有意義な時間を過ごすことができました。カナダで学んだこと、感じたこ
とを忘れずにこれからも英語の勉強をしていきたいです。



倉本 弥栄 工学部化学バイオ系学科(2015年度入学)

この研修に参加して、言語は本当に大切だということを感じました。私がこのプログラムに参加した一番の理由は、語学力向上です。私は、英語を話せるようになりたいと思いつつも、英語が得意でなく今まで英語を勉強することを避けてきました。しかし、このままではいつまで経っても英語が身に付かないと思いこの研修に参加しました。実際に海外に行くと、私の英語力は本当に低かったのだなと痛感しました。友人との他愛のない会話から、先生との会話など、頭の中ではたくさんの思いがこみ上げてくるのに言葉にできずただただ笑う事しかできず、自分の気持ちを伝えられなくてすごく悔しかったし、スムーズに会話ができなくて話している相手に対して申し訳なかったです。しかし、友達も先生も私ができるようにゆっくり話してくれるし、私のめちゃくちゃな英語から言いたいことをくみ取ってくれて、みんなの優しさに触れました。みんなの優しさに感謝しながらも、もっと英語で自分の気持ちを伝えられるようになりたい、みんなの言っていることをよく理解したいと強く思いました。その為にこのまま避け続けていてはだめだと英語をもっと勉強しようと、英語に対する意識が変わりました。

また、今回この研修に参加したもう一つの理由に、様々な人に出会いたい、異文化に触れたいという気持ちがありました。今回知り合った人たちは、自分の興味のあることなら勉強を惜しまない人たちが多かったです。日本に留学したいからという理由から独学で日本語を勉強して、たった4年間で本当に上手に日本語を話す人や、専門分野ではないのに何か国語も勉強している人など、向上心の高い人に出会い、今までの自分を振り返り、私も英語を一生懸命勉強し、その方法として大学の取り組み等にもっと参加しようと思いました。

この研修で私は、多くの人に出会い、様々な考えに触れ、多くのことを学びました。この経験を今後の糧にしてより英語の勉強に励んでいきます。



竹内 昌子 医学部医学科(2014 年度入学)

私がこのプログラムに参加した理由は、英語を話す練習がしたいと思ったことと、普通の旅行ではできないような深い海外体験がしたいと思ったことです。

私のクラスの人数は9人と少なく、先生は1人1人をよく理解しサポートしてくださいました。クラスメイトも様々な国から来た人たちで、文化的な背景の違いから、ある事柄に対する考え方に違いが出ることもあり、面白かったです。先生の指示を理解するのは比較的簡単でしたが、クラスメイトとディスカッションしたりディベートをしたりするときは結構苦労しました。最初の1週間くらいは相手の言っていることを聞き取るのにも自分の意見を表明するのにも大変時間がかかりました。小グループでポスターやビデオを作るという課題がありました。外国の人と意見を出し合い、まとめ、一つの物を作るということは今まで一度もしたことがなく、大変よい経験になりました。

英語でのプレゼンテーションも今回が初めてでしたが、とてもよい経験だったと思います。よいパワーポイントの作り方を知ることができたし、接続詞の使い方、分かりやすい文章の組み立て方も教えていただきました。

後悔していることはプログラム参加前にほとんど英語の勉強をしていなかったことです。専門の勉強だけで手いっぱい、まともに英語の勉強ができていませんでした。授業の中で単語や文法を思い出すということもあり、プログラム参加前にもう少し勉強していたら、と思う場面もありました。また、外国語は勉強をしなくなったらすぐ忘れていってしまうものなのだと改めて思い、これからは少しでも英語の勉強をしようと決意しました。

放課後のアクティビティはどれも楽しかったです。バスに乗って学外に行ったり、学内でゲームをしたりカラオケをしたりしました。土日は大都会トロントに行ったり遊園地に行ったりと大変充実していました。市内はバスが発達しており、いろいろなところに行けます。私はショッピングモールや地域の祭りに行きました。知らない土地でバスに乗るのは緊張しますが何とか行き着くことができました。

この研修に参加して、もっと英語がうまくなりたいと感じたし、いろいろなことに積極的に挑戦しようと思いました。そのように私に思わせてくださった先生方や寮のドン、プログラムで出会ったすべての人たちに感謝したいです。

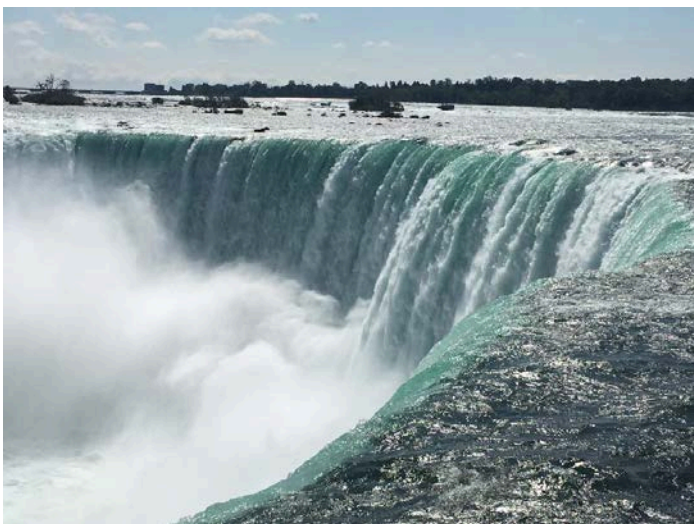


田中 一誠 工学部化学バイオ系学科(2016 年度入学)

私はカナダのウォータールー大学という、トロントから車で1時間半ぐらいの自然豊かな場所に語学研修に行きました。まず、カナダに行く前の自分はとてもカナダを楽しみにしつつもとても不安がありました。なぜならやはり勉強目的でいく海外であり、遊びとは違うからです。ほんとに授業についていけるのか、現地の人はみなネイティブであり、ついていけるのかなどそのような不安がありました。ジェスチャーでもなんとかなるかなーっと思っていましたが、日本語があっちは一切使えない言語なのでそれなりの不安がありました。また大学一年生ということもあり、実家離れして、まだ数か月しかたっていないため、ようやく鳥取での一人暮らしに慣れてきたところで、次は約三週間海外での未知な世界での生活が始まるからでした。

これらの不安を抱えたまま、着々と準備が進み、ついにカナダにつき、授業などが始まりました。先生の言っていることなどは部分部分で聞き取れ、また先生もゆっくりと話してくれるため、授業に関してはそこまで心配しなくても大丈夫でした。ただ毎回宿題などがある程度の量でいて、しっかりと勉強させる環境に置かれているなと感じました。授業の中身に関して、日本ではプレゼンテーションの授業というものがあまりないため私は初めてで、英語以外にも役に立つスキルを身につけさせてもらえ、とてもいい経験になりました。また、私がいった海外留学は寮生活であったために、ほかの大学からもたくさんの方がいて、もちろん海外の学生も来ており、とても仲良くなることができ、そこでまた英語でコミュニケーションをとらなければならないので、友達もでき、英語で話すという抵抗力がだいぶなくなったというのはほんとに実感しました。日本にいたら英語で会話することって難しいように感じるかもしれませんが、やはり英語も言語のひとつであり、日本語と同じで伝えればいいのです。ですから堅苦しく文法ばかりしている日本に住んでいるから難しく感じるだけであり、自分が持っている知識で簡単な英文で十分伝わると分かったのはほんとにうれしく、それ以来は英語で話す行為がそんなに怖くなくなりました。こういうところに日本ではわからないことを学べたのはでかい経験になり、よかったです。

まだまだ書きたいことはたくさんあるのですが、ありすぎるのでこの辺りにしておきます。そのぐらい新しい地で新しい仲間たちと出会えて仲良くなり、一緒に勉強や遊びをすることはいろいろな経験をさせてくれまじい思い出になりました。この海外研修をもとに、日本では次の英語の勉強につなげるのはもちろん、日本での外人との触れ合いも増やしたり、困っている人に助けてあげたりしていきたいとおもいます。



田邊 周 工学部社会開発システム工学科(2014 年度入学)

私はとにかく英語が苦手で、大学生のうちに英語のスキルを向上させることは入学時からの目標の 1 つとしていた。そのために、大山研修を始めとする大学内の語学強化プログラムに毎年参加し、その間にアルバイトで渡航費用も貯めながら、3 年となった今年その成果を確認するために夏期カナダ英語研修に臨むことにした。

カナダ: ウォータールー大学でのスケジュールは、平日の午前と午後 2 時間半ずつ授業、授業後の夜と週末はアクティビティ。授業の内容は文法、リスニング&スピーキング、プレゼンの 3 種類あり、慣れないながらもそれぞれ面白い授業だった。大学では英語に不慣れな学生を受け入れる体制が整っており、ネイティブの先生方はくゆっくり話してくださり、内容も大変わかりやすかった。私が滞在中は、中国、韓国などアジア系の受講生が多かったように思う。彼らは日本人よりも積極的だったが、各国ごとにまとまって行動することが多く、あまり交流できなかった。

授業を受けていて、最も日本と違うと感じた点は、日本は授業を聴くスタイルが多いのに対し、カナダでは、自分から発言していくスタイルが多いという点だ。そのため、受動的に聞いているだけだと、ほぼ授業に参加できない。せっかくカナダにまで来たのだから、日本と同じような講義の受け方をしていたのでは勿体ないと思い、私にしては奮起して積極的に発言に努めた。

その最たるものが、英語でのプレゼンテーション。限られた時間で資料を作るのには焦ったが、ここで大山研修のときに似たような課題をこなしていたので、大変助かった。(Thank you, Mr. Brooks!)このとき、フォントの種類や文字の大きさを違うように設定するべきだと教わり、ひらがなや漢字、アルファベットといったフォントそのものの扱いの違いを明確にすることは新たな発見だった。ちなみにウォータールーでは、授業に際し毎回結構ハードな課題が出され、時差と相まって慣れるのに 1 週間程かかった。

アクティビティも、部屋の中で行うものから、遊園地やラフティングといったような屋外で行うものまで様々な種類があり、飽きることなく楽しめた。特に私はラフティングが記憶に残っている。ラフティングそのものが楽しかったのはもちろんのこと、カナダの大自然を満喫できるということでも楽しめた。

ナイアガラフォールの素晴らしさは言うまでもない。たくさん写真を撮った。日常会話や買い物で英語を使うことに抵抗がなくなり慣れてくると、私のクラスは日本人がかなり多かったため、外国人と接する機会が少なかったことに物足りなさを感じるようになった。次回海外へ行く機会に恵まれるとしたら、今度はぜひ現地の家庭に滞在できるホームステイ型に参加してみたい。一緒に参加した島根大学や他大学の人たちとも仲良くなり、日本で再会する約束をしていることも楽しみの一つだ。2016 年の夏は、少しだけ私の世界が広がった。今は、次の目標をどうするかを考えている。

鈴木 菜月 農学部生物資源環境学科(2015年度入学)

私がこの夏期カナダ英語研修に決めた理由は多くの学生が集まって授業が受けられるから。私はたくさん海外の友達をつくることを目標に出発した。授業では文法、スピーキングとリスニング、プレゼンテーションの3つがあり、1日5時間勉強した。その後は企画されたアクティビティに参加して充実した日々を送った。週末はトロントや五大湖のビーチ、ナイアガラの滝などに出かけカナダを満喫した。

授業全体でスピーキングを重視しており読解中心の授業が多い日本とはずいぶん異なった。特に英語でのプレゼンテーションで話の組み立て方は勉強になった。日本人の苦手な強調の仕方学び、より伝わる英語が話せるようになった。

私が出会った中で一番印象的なのはサウジアラビアから来た2人だった。1人は医者になるために英語が必要で勉強しており、もう一人は6歳と3歳の母でありながら英語を勉強していた。普通に大学に通って長期休暇を利用して留学してきた私にとっては衝撃的だった。毎日一緒に過ごす中でいろいろな話を聞き、サウジアラビアの文化の面白さ、私の知らなかった意外な面を知った。また中国からの留学生にも驚いた。英語が本当に上手だったからどうしてなのか聞いてみたら、学校の授業が専門科目も英語で行われていると答えた。同年代の人が状況は様々でも英語の勉強に努力していることを知り、私はもっと自分も頑張らなくてはと思った。

カナダの大自然も感じた。やはりナイアガラの滝の迫力には感動だった。また一面原っぱの広がる公園でのピクニックや、川でのラフティングは自然の雄大さも感じた。自然の中でゆったりとした時間を過ごせた。どれも日本にはない素晴らしさだった。

私はこの夏のカナダの留学で多くの新しい友達ができた。そして必ず再会しようと約束した。その時までにもっと英語が話せるようになり、より深い話がたくさんできたらいいなと思う。この留学で感じたスピーキング力の足りなさを克服できるように、これからも頑張りたい。

夏期マレーシアマラヤ大学英語研修

国・地域: マレーシア

研修機関: マラヤ大学

参加者数: 22 名

期間: 2016 年 8 月 21 日(日)~9 月 12 日(月)

内容: マレーシア・クアラルンプールにあるマラヤ大学(※マラヤ大学は、マレーシアにおける最高学府として最も長い歴史を有する国立大学)人文・社会科学学部が提供する3週間の英語研修プログラム(Summer Enrichment Programme)に参加し、英語の実践的な能力を磨きます。また、文化体験の授業や小旅行もあり、マレーシアの歴史や文化に触れることができます。

そして、マラヤ大学の学生がバディとして、参加者をサポートしますので、学生同士の交流も図れます。



加地 満理奈 農学部生物資源環境学科(2016 年度入学)

「研修を終えて」

私は今回の研修に、マレーシアのことを学ぶと共に、友達を作り継続的に英語を学ぼうと思い参加しました。しかし、マレーシアでの出会いにはそれ以上のものがありました。

はじめにマラヤ大学のバディたちとの出会いです。学校で受ける授業には英語の授業とマレーシアの文化を学ぶ授業などがありました。英語の授業では、スピードについていけなかったり、咄嗟の問いに何も答えを思いつけなかったりと、自分の能力にすっかり自信を無くしてしまいました。気分が落ち込んで授業以外の時間にもあまり話さずにいると、バディが声をかけてくれました。そして悩みを話した私に、「そんなに心配しないで」と励ましの言葉をかけ、マラヤ大学のことや勉強法など、色々なことを話してくれました。部屋はほかに日本人2人も共同のため、二人きりで話すことはあまりなかったのですが、この時はたくさん話すことができたため、とても印象に残っています。次の授業からは、バディは私の近くに座り、発言のチャンスがあるたびに促す言葉をかけてくれました。それでも初めの頃は戸惑っていたのですが、最終週には何度も発言をするようになりました。バディたちは、私たちに困り事があるとどんなことでも粘り強くサポートをしてくれました。これは風邪をひいたときにも感じたことです。熱が下がってからも、バディたちは毎日声をかけてくれました。参加前の私はこれほどまでに親切にしてくれるとは思っていませんでした。3 週間という期間でも、私たちの間には信頼関係が築かれていました。そんなマラヤ大学の学生の温かみに触れ、本当に参加してよかったと感じました。

また、日本人学生との出会いからも得るものが多くありました。私の入ったクラスの日本人はみな他大学の学生でした。彼らの、英語を上達させよう、最終試験で良い成績を取ろうといった熱意には圧倒されました。プレゼンのために徹夜をしたのもいい思い出です。

この研修に参加したことで、自分の足りないところを把握することができ、次への動機づけになりました。マレーシアや日本の学生との出会いから、自分の能力向上のためだけでなく、友達として連絡を取り合い、再会を期待しようと思います。

【次に参加を希望する人に一言】

マレーシアには日本の製品やお店が多く、初海外としても参加しやすいと思います。観光気分で参加すると大変ですが、勉強面や生活面で不安があっても仲間が支援してくれます。きっと素敵な出会いが待っていますよ！



岩本 広人 農学部生物資源環境学科(2016年度入学)

「マレーシア研修」

私にとって今回初めての海外と言う事もあり、非常に緊張した状態でマレーシアに到着しました。行く前に危機管理の情報が必要と思い、テロや東洋人を狙ったスリが起こっているという情報を確認しており、マレーシアの空港に着いた時から気を張り詰めて行動していました。しかし、1,2日過ごすうちに自分の過剰反応だと言う事が分かりました。確かに事前に調べたような事件が起こっているのは事実でしたが、それをマレーシア全土、現地の人達全員に当てはめることは間違っていることに気が付きました。事前に念入りな情報を収集する一方で、現地の雰囲気を感じること大切であることがよくわかりました。

当プログラムでは、多くの大学が参加しており現地のバディも含めると100を越える人数での参加となりました。私がこの大人数参加を通して得たスキルはコミュニケーション能力です。言語間の問題の前に見知らぬ人との会話を円滑にすることが必要な場が至るところでありました。例えば食事中、授業中のディベートやプレゼンテーションなど受け身の参加から自分発信へと立場を変えられるようになりました。

今回のプログラムで感じた改善・チャレンジしようと思った点は英語の文法や単語力など、ライティング力の向上です。英語での会話においては伝えることが難しいワードは言い回しを変える、またはジェスチャーを用いることであまり苦労することはありませんでした。また、英語でのコミュニケーション力に比べると聴く力は劇的に上達しました。その要因は1日4時間の授業と2時間の課外活動に加えて3人の日本人と1人のローカルバディでの共同生活が大きかったと思います。私と共に生活した現地のバディはこのプログラムの少し前まで1年間韓国で似たような英語研修プログラムに参加していたので、英語で会話プラス多くの興味深い経験談を聞くことができました。

当プログラムを通して1番感じた事は自分の選択肢の狭さです。海外に1度行ったくらいで広まった訳ではありませんが、これまでの自分の可能性、視野の狭さを認識することができました。できるかどうかの前にどんな選択肢があるかを考える、そうすることで今後の大学生活が豊かになると感じました。

【次に参加を希望する人に一言】

楽しむことを一番に行動してください

胡摩 智英 工学部化学バイオ学科(2016年度入学)

「充実した研修」

正直、研修前は期待よりも不安のほうが大きかった。自分にはあまりコミュニケーション力もないし、英語力も乏しかったので、3週間もの間、耐えることができるかが一番の不安要素であった。

だが、実際にマレーシアに到着後、そのような不安は少し拭えた。なぜならば現地のマラヤ大学の学生たちがとてもフレンドリーで、いい人ばかりであったからである。ローカルボディのみんなは親しみやすく、とても面白い人が多く、そのために自分も話したり、向こうの話を聞くことが出来た。特に、私のボディはとても素晴らしい人物で、健康面のケアなど、私たちが快適に過ごせるようにと、とても気を使ってくれた。最初は不安しかなかったが、時間はあっという間に過ぎて、3週間はとても短く感じた。期間中、体調を崩してしまった時があったが、それ以外はとても充実していたと思う。

振り返ってみると、良かったことは、マレーシアの文化を実際に経験できたこと、異文化を理解し、共存することはとても大切だとわかった。また、英語を使ってコミュニケーションもしっかりとることが出来た。今後より一層、英語力をつけていきたいと思った。具体的には文法力と語彙力を今まで以上に伸ばしていきたい。そして、今後また海外に行く機会を得ることが出来たらもっと流暢にコミュニケーションをとれるように頑張りたいと思う。

【次に参加を希望する人に一言】

積極的に英語を使えば、それだけで充実できます。

細川 航輔 工学部化学バイオ科学学科(2015 年度入学)

「初の海外と異文化交流」

私は8月21日から9月11日の約3週間、マレーシアの首都クアラルンプールにあるマラヤ大学へ21人の仲間と共に英語研修に参加しました。私にとって海外は初めてだったため、自分の英語がしっかり伝わるのか、慣れない土地で生活できるのかという不安と、逆に今まで経験したことのないことを学び、他国の異文化を知ることができるという期待の半分半分でした。私は、小学生の頃、英会話を習っており、英語は好きでしたし、得意科目でもありました。だからマラヤ大学のバディとの会話も、ある程度成り立つだろうと思っていました。しかし現実はその上手くはいきませんでした。最初はバディの話すスピードは早いし癖もある、自分の語彙不足で単語の意味が分からない、いざ話そうとすると単語が思いつかない、文法が滅茶苦茶になる、ということがしばしば起こりました。ここで初めて自分の英語力の無さを実感しました。授業で習う英語と実践の英会話の違い、書く英語と話す英語の違いに気づきました。しかし、3週間いると意外と変わるもので、自分たちのバディや他のバディの話していることが全部ではないけれど理解できるようになったし、多少文法が滅茶苦茶でも言いたいことは伝わるようになりました。マレーシアのバディはとても良い人ばかりで、私のルームメイトが体調を崩して寝込んでいたとき、私たちのバディは1日中看病をしていました。また、私たちのバディ以外のバディも体調を気遣う手紙を渡してくれる等、何かと気にかけてくれました。人を思いやる気持ちは国籍が違っても変わらないのだと感じました。私たちが帰国する時もバディ達は涙を流してくれました。英語学習だけではなく、かけがえのない友人たちを得て、私にとってこの語学研修は一生の思い出になりました。

研修が終わっても一緒に活動したバディや他大学の人も Facebook や twitter で繋がっているし、会話もしています。お互いに、日本やマレーシアで再会しようと約束をし、計画を立てています。

この研修で普段の現地のバディとの会話、クラスごとに行われたリーディングやライティングの授業を通して、以前の私より英語力は向上したと思います。英語だけでなく、初の海外ということで海外の様子や治安、文化の違いなど実際に行ってみないと分からないようなことを学びました。これらの経験を生かしてこれからも英語の勉強を続けていきたいです。

【次に参加を希望する人に一言】

マレーシアのプログラムは唯一現地のバディと一緒に生活できるのでオススメです。また、治安も良いほうだと思うので、初めて海外に行く人にも良いと思います。英語の授業も日本とは違ってワイワイしているので違いを実感できると思います。



松尾 京亮 医学部生命科学科(2016年度入学)

「研修を終えて、今思うこと」

私が夏期マレーシアマラヤ大学英語研修に参加した理由は二つある。一つ目は、英語に対する苦手意識を変えるためだ。もともと英語が得意ではなかった私は、鳥取大学で英語の授業を受けている時でも英語で会話することに対する抵抗があった。しかし今回、このプログラムに参加し、英語で話さなければ意思の疎通が出来ない環境に身を置いたことで、参加前に抱いていた抵抗は薄れたように感じる。二つ目は、マレーシアの文化を体験するためだ。マレーシアは国民の多くがイスラム教徒であり、様々な場所で礼拝している姿を見ることが出来た。私のバディもイスラム教徒で、毎朝欠かさず礼拝している姿には人々に対しての宗教の影響を感じた。また、食事はやはり日本のものとは様々な違いがあった。唐辛子を使った様々な料理は、汗が滝のように出るほど辛いけど美味しかった。一度料理に入っていた唐辛子をそのまま齧ってみたが、口内が焼ける様に痛くなり、二度と齧らないと決めた。他にも、マレーシア人が大好きだというドリアンを食べてみたが、まず匂いが想像していた以上にきつく、味も何とも言えないものだった。これはあくまで一個人の感想だから、マレーシアに行くことがあればぜひ一度体験してみしてほしい。このような様々な異文化を体験出来たことは私にとってとてもいい経験になったと思う。

今回の研修ではいろいろな思い出を作ることが出来たが、一番参加して良かったと思えることは、マレーシアのバディや日本の他大学の学生と親交を深めることが出来たことだ。初日にインターナショナルハウスでの部屋割りが発表された時、私はバディや同室の学生と仲良くなれるかとても心配だった。しかし、バディも同室になった学生もとても優しく、すぐに打ち解けることが出来た。一緒にショッピングモールに行き夕飯を食べたり、夜は談笑したり、今回の研修を楽しく終えることが出来たのは彼らのおかげであり、本当に感謝している。

今回の研修は三度目の海外渡航だったが、一番思い出深いものになった。これからもっと色々なことを勉強し、様々な体験をしていきたいと思う。

【次に参加を希望する人に一言】

マラヤ大学のバディはとても親切にしてくれるので困ったことがあればなんでも相談してみるといいと思います。



石原 卓弥 地域学部地域政策学科(2016 年度入学)

「留学を通して」

マレーシアでの3週間は長いようで短かったです。私にとっては初めての海外での生活ということもあり、聞こえてくる言葉など全てが新鮮でした。しかし、バディ達はとても温かく、優しく迎え入れてくれ、辛い時でも頑張ることができました。授業は全て英語で初めは分からないことも多々ありましたが、だんだん分かるようになってきて嬉しかったです。また、授業のスタイルが日本とは違い、学生が皆積極的に発言する姿勢は見習わなければならないと思いました。3週間の授業の最後には、Closing Ceremonyがありました。ここでは、色んな種類の伝統衣装を着て、授業で練習した伝統音楽やダンスを発表しました。私は音楽を選び、演奏しました。ここでも今まで触ったことのない楽器を英語で教わって練習するので大変でしたが、セレモニーで演奏し終わったときの歓声を聴くととても嬉しかったです。ダンスはとても難しそうでしたが、どちらともマレーシアの文化を感じることができよかったですと思います。

3週間の研修では、各自の英語のスキルアップはもちろん、バディ達、他大学の人、マラヤ大学の教授など数多くの人とのつながりを作ることができました。ホームステイでのシャワーのない生活やご飯を手で食べたことなど、日本にいただけでは経験できなかったらうなということもたくさん経験できました。食文化や生活様式も日本と違う点が数多くあり、それを知るきっかけにもなりましたが、まだまだ入り口に過ぎないのでこれからさらに理解を深めたいです。

この3週間を通して、最初は英語を聞き取れず何回も聞き返していましたが、少しずつ聞き取れるようになり、最終的にはあまり聞き返さずに答えられるようになりました。

このように、留学に来てよかったなと思うことがたくさんありました。私はこの経験をこれからの生活に少しでも生かしていけたらと思います。また、この経験をこれから留学する人達にも伝えていきたいです。

【次に参加を希望する人に一言】

とても貴重な経験になると思うので、楽しんで、たくさん勉強してください。



川村 菜緒 農学部生物資源環境学科(2016年度入学)
「マレーシアでの学び」

私はこのプログラムに参加することで、多くのことを経験し学ぶことができました。

まず、マラヤ大学での授業では、どの授業も受動的に受けるのではなく能動的に授業に参加していくことが求められるので、初めはあまり発言できませんでしたが、だんだん自分で考えて意見するようになりました。これからの日本での大学生活でも、能動的に自分で考えていくことが必要だと思いました。また、現地の大学生の学ぶ意欲がとても強く、見習わなければいけないと感じました。

そして、バディたちと会話をしている中で、自分が伝えたい事が英語でうまく伝えられることができなかつたことが何度かあり、とても悔しい思いをしました。なので、よりコミュニケーションをとって、自分が伝えたい意見や感情を伝えられるように英語を話せるようになるようにもっと英語を勉強しないと感じました。

マレーシアは近年発展してきているとはいえ、発展途上国を実際に見て、そこで生活したことは私の中でとても良い経験です。また、私は今回行ったマレーシアが初めての海外だったのですが、このプログラムに参加して、バディと三週間一緒に生活することによって、他の国の生活や、文化、宗教を知ることができたことは私の最も大切な経験で、自分の価値観や世界観を広げることができたと感じました。特に、私はイスラム教についての話にとっても興味がわき、もっと知りたいと感じました。

このプログラムに参加する前は、英語でコミュニケーションをとれるのか、マレーシアの生活習慣、文化などになじめるのかなど不安なことがたくさんありました。ですが、気さくな現地の学生のおかげでも充実した三週間を送ることができました。このプログラムに参加して初めて海外に行きましたが、日本だけで過ごしているのはもったいないと感じました。ですので、これから様々な国に行き、様々な生活や文化を体験し、自分の世界を広げていきたいと思っています。

【次に参加を希望する人に一言】

現地の学生と三週間暮らすことで、普段の生活から英語を使い、生活や文化の違いを知ることができるので、勉強だけじゃない様々なことを身に付けられると思います！



前川 珠実 農学部生物資源環境学科(2016年度入学)

「これからの私がすること」

このプログラムに参加して、リスニング力が上がったように思えます。はじめの1週間は先生の英語もローカルバディの英語もなかなか聞き取ることができませんでした。ですが、2週目にはいと話すスピードにも慣れ、いつの間にか聞き取れるようになっていくことに気がきました。このプログラムには英語のレベルの異なる日本の学生が集まっています。同い年の学生がローカルバディと楽しそうに話している姿や授業中に積極的に発言している姿に刺激を受け、英語を話したいと思う意欲が大きくなりました。さらに、今の自分に徹底的に足りていないのが単語力であると気がきました。単語は聞き取れるのにその単語の意味が分からないことで会話の内容が理解できないことがしばしばありました。さらに、会話は文法が間違っていることもすることができると知りました。極端に言えば、単語に身振りをつけることで大体のことを伝えることができるのです。ですので、私はまず自分の単語の数を増やしていこうと思います。その次の段階で文法の勉強をしようと思います。

留学前は海外に行って英語に浸ることで自然に英語力が上がると思っていました。ですが今回のプログラムは日本人の参加人数が多く日本人同士の会話が日本語になってしまうなど、想像していたように英語に浸ることができませんでした。英語力を上げるために日本人同士でも英語で会話するという努力が私には足りませんでした。短い期間でより多くのことを吸収するためには積極的に自分から行動を起こす必要があると思います。また、効率的に英語力を上げるには日本での座学も有効であるとのプログラムを通し思いました。日本で勉強したことを英語圏の現地で実践、練習しそれを通して英語力を上げることが留学であると思います。

これから、今私ができる単語などの勉強をし、もう一度留学したときに英語力の伸びを実感できるようにしたいです。

【次に参加を希望する人に一言】

様々な人に出会うことができ世界観が変わる。



太田 勝也 工学研究科情報エレクトロニクス専攻電気電子工学コース(2016 年度入学)
「異文化交流できる喜び」

今回のマレーシアマラヤ大学夏期英語研修で多くのことを学び、考え、感じたため3つの内容にわけて報告します。

1 つ目は、授業内容についてです。初めて参加した英語研修でしたが、マラヤ大学のバディがとても親切であり心から楽しみながら英語を学ぶことができました。マラヤ大学での授業は私にとって楽しく集中させてくれるものでした。日本ではあまりないような対話形式の授業やチームで議論しながら答えを導く授業などが印象的でした。私個人としても、積極的に参加し、集中して内容を聞き取ることができリスニング力も向上したのではないかと感じました。少し残念であったのは、日本人の参加学生が今回のプログラムでは多すぎたことです。英語一色と意気込んで参加しただけあって、初めは残念な気持ちが強かったですが、研修の途中で気持ちを切り替えて、楽しく積極的に現地のバディと会話をすることができました。

2 つ目は、観光・ホームステイについてです。3 週間という短い期間ですが観光、買い物などクアラ Lumpur を堪能できました。私にとって海外は今回が初めてであり、訪れる場所すべてが新鮮で感動しました。特に印象的であるのは、1 泊 2 日のホームステイです。ホームステイ先で、日本の凧揚げと同じようなカイと呼ばれる遊びをしたり、泥水の中で魚取りをしたり今ではなかなかできないような体験ができました。子供のころのような気持ちで、心から楽しみました。また人生で初めて右手のみを使い食事をとりました。少し抵抗はありましたが、今では非常に貴重な体験ができたと感じています。

最後に、私の将来についてです。今回の海外研修で自分の中の世界が大きく広がり、異なった文化や習慣をもつ人と交流できる幸せを身に染みて感じました。自分の持つ頼りない語学力でも、伝えようとする気持ちや積極的に行動する度胸があれば海外の人ともうまく交流できると確信しました。今まで以上にうまくコミュニケーションをとれるよう、積み重ね練習していこうと考えています。また、来年は就職活動を行います。海外で働くことも視野に入れることができました。特に私が学んでいる電気電子の分野では、マレーシアのような発展途上国への進出は多くの企業が行っているため世界を舞台に仕事ができる人材になるために今後も強い意志をもって能力を伸ばしていきたいです。将来、世界中を飛び回りたいと思えるような研修でした。

【次に参加を希望する人に一言】
自ら動けば成長できる

大島 祐輝 農学部生物資源環境学科(2015年度入学)

「マレーシアで考えたこと」

私は今回マレーシアの研修に参加してみて本当に良かったと感じています。私自身海外経験はほぼなく、実質今回が初めてでした。参加した理由は周囲の人からの勧めが大きかったと思います。ただ、実際にマレーシアに行ってみて私が聞いていたよりもかなりの数の日本人がいてとても残念だったのが今でも記憶にあります。しかし、現地の学生や先生たちは非常に優しくかったです。私はこの三週間、英語を話すことに必死でした。少しでも多くの時間を現地学生たちと英語を使って話す時間に使いたいと思っていました。この研修の中で、一番大きなカルチャーショックは、現地の学生が SNS ツールをよく使っていたことです。中には授業中も触っている人もいました。マラヤ大学のグローバルネットワーククラブ(GNC)ではそれほど密なメッセージのやり取りが必要なのだろうと考えました。マレーシアの食事はとてもおいしかったです。特にナシゴレンを食べることが出来てよかったです。しかし、一度だけ、激辛のナシゴレンを食べてしまいお腹を痛めました。ドリアンも食べました。最初の一口二口は食べられそうだなと思っていましたが、だんだんと口に入れるのが困難になってきました。次は3年後くらいに食べたいです。また、今回の研修のメインの一つと言えるのが新しい友達を作ることだったと思います。日本に住んでいると、日本語を話せない友達を作ることがまずできないと思います。しかし、今回のようなプログラムを利用することで新たな友達を作ることが出来ます。このことは、普段の生活では決して得ることのできない忘れられない経験で、一生忘れられないと思います。私は、最初こそ人が多くて残念でしたが、その分現地の学生も多く、多くの人とかかわることが出来ました。

【次に参加を希望する人に一言】

楽しんできてください。



中野 遥 地域学部地域環境学科(2016 年度入学)

「研修を通して」

このプログラムに参加して自分自身が変化したと思うことが二つあります。一つ目は、英語の学習への意欲が高まりました。マラヤ大学の方々は英語をスラスラ喋っていて、英語だけで行われるスピードの速い授業にも普通についていけるくらい聞き取れていました。私はこのことにとっても衝撃を受けました。今回の研修を通して英語があまり出来なくても伝わるといことが分かったのも事実ですが、それ以上にもっとちゃんと会話できるようになりたいと思いました。マラヤ大学の方々はたくさんの単語を知っていて、文の構成もすぐにできて、話したいことを英語でどんどん話することが出来るのが凄いなと思いました。筆記の勉強だけではなく英会話が出来ようになりたいと思いました。二つ目は、世界のことに興味が出ました。今回のプログラムが私にとって初めての海外渡航でした。このプログラムに参加するまで海外はとても遠い存在で、とても怖いものでもありました。しかし参加したことで、日本では体験出来ないようなことが出来たり、見る事が出来たりして、毎日がとても充実していて楽しかったです。日常生活の一つ一つが日本とは違なり新鮮でした。マレーシアは日本より治安が悪く危険かもしれませんが、危険だけでなく現地の方々の優しさにも触れることが出来て、良い意味で怖さが減りました。そのため、また海外に行ってみいたいという意欲もわきました。

また改善したいと思うこともあります。まず、もっと勉強しなくてはいけないと思いました。入学してから、ダラダラした毎日でした。しかし、時間のある大学生のうちにもっと勉強しなくてはならないと思いました。英語の学習はもちろんですが、もっと日本の事についても勉強しなくてはならないと思いました。マラヤ大学の方々はマレーシアの独立までの歴史など自国について多くの事を知っており、教えてくれました。そんなマラヤ大学の方々を尊敬するし、日本についても分からない自分が情けないなと思いました。なので、これからの大学生活で多くの事を学んでいこうと思いました。

このプログラムを通して、多くのことを得ることが出来て、忘れられない思い出となりました。このプログラムに参加して本当に良かったです。

【次に参加を希望する人に一言】

きっと素敵な経験になると思います！楽しんでください！



辻岡 立 地域学部地域文化学科(2015 年度入学)
「夏期マレーシアマラヤ大学英語研修に参加して」

私は、約3週間の夏期マレーシアマラヤ大学英語研修のプログラムに参加しました。海外プログラムに参加しようと決めた理由は、英語力の向上という目的もありますが、日本人だけではなく海外の異なる文化の中で生活をするたくさんの人と交流を持ちたいと思ったことや、人見知りする性格を少しでも変えることができたらいいなとも思ったからです。また、いくつかの研修先がある中でマレーシアを研修先に決めたのは、日本と同じアジアというくりにある国ではありますが、宗教や習慣などが異なるマレーシアならではの文化に触れたいと思ったことや、事前の説明会で聞いたバディ制度にとっても惹かれたからです。

夏期マレーシアマラヤ大学英語研修では、月曜日から金曜日まではマラヤ大学で授業を受け、週末は観光やホームステイなどのアクティビティを体験するというかたちでした。大学では、英語の授業だけではなく、マレーシアの文化についてのレクチャー、ダンスや音楽の体験など、たくさんのことを学びました。また、週末は観光やホームステイということで、マレーシアの文化などをたくさん感じることができました。現地での生活は、事前に聞いていた1対1のバディ制度とは少し異なっていて、複数の日本人に対して1人の現地のバディがつくというかたちでしたが、マラヤ大学の学生だけではなく、他大学の日本人学生との交流にもなり、とても楽しく、お互いに助け合いながら3週間を過ごすことができました。マラヤ大学の学生たちはとても優しく、私のつたない英語でも一生懸命理解しようとしてくれ、その優しさのおかげで、「伝わらなかったらどうしよう」「間違った英語だったら恥ずかしいな」などと考えることもなく、話すことに抵抗もなく、たくさんコミュニケーションをとることができました。

3週間と言う短い期間ではありましたが、本当にたくさんのことを吸収することができた時間でした。それと同時に英語を使うことの難しさや英語の重要性など、自分のこれからの課題も見つけることができたような気がします。そして、これからこの経験を生かすことができればいいと思います。マレーシア最高！！！！

【次に参加を希望する人に一言】

本当に行く価値のあるプログラムです。きっと自分にプラスになるなにかを見つけることができます！！！！



島田 季依 農学部生物資源環境学科(2015年度入学)

マレーシアでの3週間は本当に楽しく、新しい発見のある毎日でした。マレーシアの文化・習慣・食べ物・現地人の人柄など実際に生活してみないと気が付かない多くのことを学ぶことができました。そして、3週間という期間、いつでも英語を話す環境で過ごしたことは貴重な経験になりました。

私はずっと英語を話すことに苦手意識がありました。しかし、英語が上手く聞き取れず何度も聞き返してもバディ達は OK!と言って何度も繰り返してくれたり、ゆっくり話してくれたり、もっと分かりやすい言葉で伝えてくれたりしましたし、私が上手く言いたいこと伝えられない時も、理解しようとしてくれました。いつの間にか、私の苦手意識は消えていて、マラヤ大学のバディ達と英語で会話することがとても楽しいと感じるようになっていました。私自身が研修前と一番大きく変わったことはこの点で、英語をもっと話したいと思うようになったことです。今後、日本でも機会を見つけてたくさんの外国の方と英語で会話したいです。私のバディは本当に日本が好きなので、日本に行きたいといつも言っていました。私たちは日本で再会することを約束したので、再会した時には今回の研修よりずっと成長した私で会いたいです。そして、再会したときには、今回は英語で上手く伝えられなかったこと、話せなかったことをたくさん話し、日本のことをたくさん教えてあげられるようになっていたいと思います。

この研修では日本の他大学の人も多く参加していて、一緒に授業を受けたり、観光に行ったりしました。コミュニケーションをとるのが上手い人や英語にとっても興味をもっていて、熱心に勉強している人とたくさん話し、仲良くなれたこともいい刺激になりました。

私がこの研修に参加した理由は春にあるコースの海外研修で少しでも多くの英語を理解し、より良い研修にしたいと思ったからです。それには、単語などまだまだ勉強が足りない部分ばかりですが、マレーシアでの経験を活かして頑張ります。



福田 竜也 農学部生物資源環境学科(2016年度入学)

「夏期マレーシアマラヤ大学英語研修」

私は、この夏期マレーシアマラヤ大学英語研修でプトラジャヤやピンクモスク、ツインタワー、マラッカ、ナショナルミュージアム、ナショナルモニュメント、中国式の寺、バテウケーブ、バードパーク、植物園など様々なところを訪れたり、伝統的なダンスやホームステイ、バティックペインティング、泥まみれになりながら行った魚とり、英語でのディベートやプレゼンなど多くの貴重な経験をすることができた。また、滞在中は日本人3名現地のバディ1名の4人での共同生活を送った。その中で、日本人同士でも多くの友達を作ることができたが何より互いに様々な刺激を得ることができた。バディとの共同生活や博物館、マレーシアについて学ぶ授業の中で日本とは異なった多民族国家であるマレーシアでは、いかに文化や習慣が異なった民族が共存しているのか知った。また、日本人にはなじみが薄いイスラム教についても理解を深めることができた。

また、日本人だけでタクシーやバス、電車などの公共交通機関を使ってショッピングモールなどに買い物に行ったり、一人で夜市に行けるほど現地の治安はよかった。またそれらの経験からひとりで海外に行ったり、海外で公共交通機関を利用することに対する自信をつけることができた。

今回の夏期マレーシアマラヤ大学英語研修で異なった文化や宗教を持つ様々な民族が共存している多民族国家であるマレーシアで生活し、マレーシア人同士が互いの文化や習慣を理解し尊重していることを知った。また、イスラム教に対する理解を深めたいというのがこの夏期マレーシアマラヤ大学英語研修に参加した理由の一つだったが、バディとしてイスラム教徒の友達ができただけで、またバディの中にはイスラム教への誤解を解きたいとの思いから積極的にイスラム教について教えてくれるバディもいたことから、イスラム教に関する前から持っていた疑問を聞くこともでき、イスラム教に対する理解がとても深まった。

【次に参加を希望する人に一言】

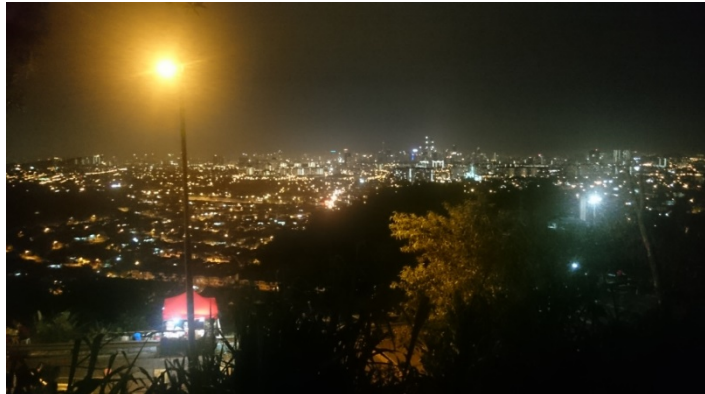
とてもいいプログラムだったがバディが1人に1人つくという説明だったのに、違っていたことが非常に残念だった。



米田 裕也 地域学部地域文化学科(2015年度入学)

「プログラムに参加してみて気付いたこと」

このプログラムに参加して感じたことは、どれだけ講義などで勉強をしても、宗教や文化に対する固定観念が全くなくなることはないということです。地域文化学科では名前の通り文化について学ぶことがあります。文化の定義は幅広く、宗教、生活習慣など様々なことをいいます。マレーシアの国教はイスラム教であり、イスラム教は右手と左手の使い分けがあり、左手は不浄とされていると学びました。また、半ズボンなど肌の露出は宗教上よくはないとも学んでいたため、気を付けなければならないことが多いと思っていました。しかし、実際にマレーシアに行くと、イスラム教を信仰する人たちにも信仰心の違いがあることに気が付かされました。イスラム教を信仰する人たちは、豚肉を食べることは決してなく、毎日の御祈りも行っていました。けれども、そのほかの部分に違いがみられました。信仰心の高い人たちはイスラム教の教えをしっかりと守っていますが、信仰心の弱い人はイスラム教の教えをすべて守っているわけではありませんでした。マレーシアにくるまでは、イスラム教を信仰している人たち全員が教えを厳しく守っているものだと考えていましたが、実際はそうではなく幅広い信仰心があるということを実感しました。このように講義で学ぶだけだと情報を手に入れるだけであり、自分が考えている以上に固定観念になっているということを知り、実際に物事に体験したり触れてみるということが大切だと考えるようになりました。また、プログラムに参加して学んだことは、英語は使うことが大切だということです。プログラムに参加するまでは一度も海外に行ったことがなく、英語を使ってコミュニケーションをとることができるのかといった不安もたくさんありました。しかし、授業やコミュニケーションをとるうえで英語を完璧に使うことはできなくても、使っていくうちに文法の間違いや正しい英語について知ることができ、英語に対する不安はなくなっていきました。私の英語力は十分ではありません。そのため、日本では英語を使う機会はほとんどないですが、なるべく英語を使用する機会を作っていき、英語の上達を目指していかなければならないと感じました。



【次に参加を希望する人に一言】

とりあえずはやってみることが大切です。

堀田 朋花 工学部社会システム土木系学科(2016年度入学)

私は今回の研修で学んだことが3つあります。1つ目は文化です。日本と違ってマレーシアには多種多様な人がいることを知り最初は驚きました。私は無宗教なので宗教を信仰する人の気持ちがわからなかったけど、ローカルバディの話聞いて少し理解できるようになりました。例えばイスラム教の人は毎日お祈りを5回することや神を信じているので自殺する人が少ないということを聞きました。特にその国の文化を理解しようと思ったらその国に行かかないと分からないという言葉聞いて感動しました。またモスクに行きお祈りをしているところを初めて見られたことや自分にヒジャブを巻いてもらったことは良い経験でした。2つ目は大学の授業です。マレーシアの授業は1コマ2時間で、全部英語の授業で先生の話すスピードが速すぎてついていけません。またディスカッションやプレゼンテーションの授業が多く、最初は全然話すことができませんでした。しかし授業でゲームをしたり、ローカルバディの人がわかりやすく説明してくれるので英語を身近に感じることができました。そして最後の方は少し話すことができるようになりました。3つ目はマレーシアと日本の生活の違いです。とくに驚いたのはトイレです。ティシュペーパーを流したらダメなところがあることと、お金がかかるところがあることに驚きました。次に驚いたのは時間にルーズなこと。バスの時刻表がないことや帰りのバスがなかなか来なくて驚きました。しかし最初のうちはホームシックになったけど段々その国の文化を受け入れることができました。

私はこれからも英語をもっと勉強し、日常の会話がスラスラできるくらい勉強しようと思いました。これから様々な国に行って、歴史や文化を学びたいと思いました。そして卒業するまでに TOEIC600点取れるように頑張りたいです。また、まだ海外に行ったことがない人に興味を持ってもらえるように努力しようと思いました。

【次に参加を希望する人に一言】

充実した3週間を送ってください。



末吉 孝大 農学部生物資源環境学科(2015年度入学)

「3週間のできごと」

まず私がこのマレーシアマラヤ大学英語プログラムに参加した動機は、単に英語が話せるようになったらいいなと思ったからである。私はこれまで英語が嫌いで敬遠してきたので、もちろん英語が話せるわけではないので、現地のバディと上手くコミュニケーションがとれるかとても不安だった。予想は的中だった。初めての外国、不慣れな英語での意思疎通、すべてが新鮮すぎて、相手が言ったこと理解できなかったらどうしよう、自分が思ったことをどう英語で伝えようか、とても困惑していたことを覚えている。しかし、仲良くなるのに時間はそうかからなかった。バディたちはとてもフレンドリーでそしてクレイジーで時にバディのテンションについていけないことさえあった。授業が終わるといつもタご飯や行きたい場所(ショッピングモールなど)に連れて行ってくれ、いつも授業終わりが楽しみだった。このプログラムで一番異文化を感じたのは1泊2日のホームステイであった。マラヤ大学がある首都クアラルンプールと比べホームステイ先はパーム畑や水田などがある私がイメージしていたマレーシアであった。そこでの踊りの鑑賞や食事を手で食べる経験は異文化を知るいい経験になったと思う。今回のプログラムはマラヤ大学の学生との交流だけではなく、日本の他大学との交流もすることが出来た。鳥取大学をはじめ、福井大学、東北大学、関西学院大学、大阪府立大学、法政大学、近畿大学の7大学がこのプログラムに参加しており、史上最大規模の参加人数となっていた。他大学の学生と同じ授業を受けたりすることで、刺激を受け英語を学ぶモチベーションになった。今回のプログラムで自分自身変わったことは、臆せず英語で外国人に話すことができたことである。今までは自分の英語力に自信がなかったが、意外と自分の英語力でもコミュニケーションが取れることが分かり、とても自信になった。その一方自分の単語力の無さを痛感することができ、自主的に英単語を勉強していきたいと感じた。最後に、この3週間のプログラムでは英語力を向上させるには物足りないと思った。なので、これからも積極的に英語研修プログラムに参加したいと思う。

【次に参加を希望する人に一言】

1回だけの英語研修プログラム参加で満足せず、何回でもトライした方がいいと思う。



齊藤 俊之介 農学部生物資源環境学科(2016 年度入学)

私は、今回参加したマレーシアマラヤ大学英語研修で大変だったこと、辛かったこと、だけでなく楽しかったこと、自分の身になったことなど多くのことを経験することができた。最初の一週間は辛いことが多くあった。初めて訪れた国で慣れない環境であったため、普通に生活するだけでもストレスが溜まっていた。だが、ルームメイトやマラヤ大学のバディに支えられてなんとか過ごすことができた。食生活でも始めは苦労した。マレーシアの料理は辛いのか甘いのかの両極端で日本食がとても恋しくなった。だが、マレーシアではチキンが一般的でチキンはとてもおいしかった。マレーシアの料理で一番気に入ったのは、ロティチャナイという料理だ。これは安くておいしく、様々な味もあったので何度も食べた。食生活で苦労したとは述べたが、私はまだいいほうであった。私以外にも食に苦労している人は多くいて、お腹を下す人も多くいたが、私はお腹を下すことなく過ごすことができた。辛いと感じるマレーシアの生活は二週間目の前半までであった。二週間目の始めは、私を含めみんな溜まっていたストレスが出てきたのか体調を崩し始めた。だが、後半からはマレーシアの環境に慣れてきて過ごすのは苦ではなくなった。英語の授業を通して学んだことは、貴重なものだった。マレーシアの人は英語が流暢で日本人よりも英語が話せるが、文法の授業では、日本人の方ができていた。英語を話すにはもちろん基礎的な文法は必要だが、あまり難しいのは使わなくても英語でコミュニケーションは十分にとれることを知ることができた。マレーシアで最も印象的な活動はホームステイである。ホームステイ先は自然豊かな土地であった。ここでは、マレーシアの伝統的な遊びを体験することができた。魚取りは結局泥んこ遊びに変わってしまったが、みんなで泥まみれになったことはいい思い出となった。残念だったのが、一泊しかできなかったことだ。せっかくのホームステイだから三泊くらいしてもっといろんな伝統的なことを体験してみたかった。この研修が始まったころは辛いことも多くあり、日本が恋しく思うことがあったが、後半は楽しいことが多く、いろいろなことが体験でき、マラヤ大学のバディと別れるのが悲しかった。また、いつかマレーシアに行きバディ再会したい。

【次に参加を希望する人に一言】

必ずいい経験になると思います。



夏期アメリカ英語研修

国・地域:アメリカ合衆国

研修機関:カリフォルニア大学デービス校

参加者数:9名

期間:2016年8月11日(木)~9月12日(月)

内容:夏休みにアメリカ、カリフォルニア大学デービス校(UCデービス)エクステンションで開講される英語研修「Communication and Culture Program」に参加しました。1日4時間の英語の授業の他、放課後(16:30~)はMovie and PopcornやConversation Club、Ice Cream Socialなどのアクティビティがあります。滞在中はアメリカ人の家庭にホームステイし、アメリカの文化に触れながら日々の生活の中で生きた英語の習得が期待できるプログラムになっています。

なお、プログラム開始時に実施されるプレースメントテストでレベル別に分かれてプログラムを受講できますので、初心者から上級者までレベルにあった内容で研修が受講できます。



